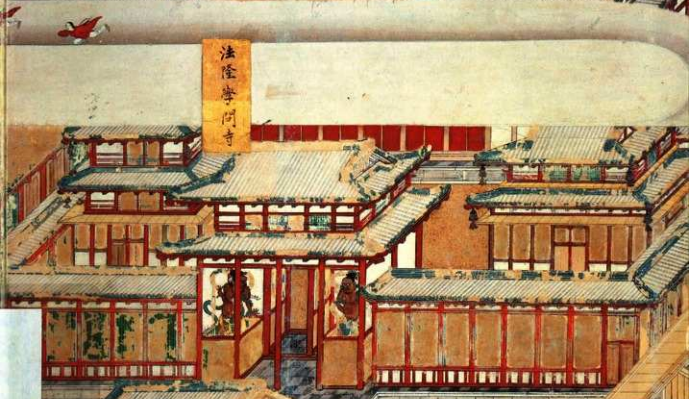


法隆寺発掘調査概報Ⅲ



太子平城久而不
起尤右開眼乃
知遷化

法隆寺

正誤表

	上からの行数	誤	正
目次	19	(西から)	(南から)
3	1	昭和55年	昭和57年
18	14	cm	10cm
22	10	では	づくは
26	17	暗栗	暗栗
27	10	皿	トール
27	25	E	D
30	1	23回	33回
32	19	口徑部	口縁部
38	11	<全文>	<トール>
	12	撰である。	著わされた
39	11	付宝類	付宝類
40	15	須忠器ノ	須忠器や
46	29	凸面を	もっとも多い平蓋は凸面を
48	20	暗青灰色	暗青灰色
49	25	陶色古窯跡	陶色古窯跡
50	3	バランス	バランス
52	2	西麓	西麓



第259トレンチ出土三彩盤(右外面, 左内面)



瓦窯SY5060(北から)

法隆寺発掘調査概報 Ⅲ

法 隆 寺

序

本書は昭和58年度に行われた法隆寺防災工事に伴う事前発掘調査の概要である。今回の発掘調査に於いては法隆寺に伝承される伏藏のうち、未確認であった一つが発見される等、新たな重要遺構の発見が相次いだ。

ここに昨年発行された「法隆寺発掘調査概報Ⅱ」に続いて、発掘調査を担当されている各位に依頼し本書を公刊することにした。なお、法隆寺新収納庫建設に伴う事前発掘調査の結果も合わせて公刊することとした。この調査報告を披歴することに依り法隆寺研究が一層進展することを期待するとともに、発掘調査ならびに本書公刊に全面的に御協力をいただいた奈良国立文化財研究所及び奈良県立橿原考古学研究所各位に厚くお礼を申し上げたい。

昭和59年7月

法隆寺管主

大野可圓

目次

序

第一部 防災工事に伴う発掘調査

I 序章

1. 防災工事……………1
2. 昭和57年度までの調査概要……………3
3. 昭和58年度の調査概要……………8

II 検出遺構の報告

1. 西円堂周辺地区……………9
2. 三経院及び西室周辺地区……………11
3. 円明院跡周辺地区……………20
4. 中門・南大門中間地区……………22
5. 大湯屋・西大門間及び中院西辺地区……………26

III 出土遺物の報告

1. 瓦類……………28
2. 土器類……………32
3. 金属製品ほか……………36

IV まとめ

1. 遺構……………37
2. 遺物……………38

第二部 法隆寺収納庫建設に伴う発掘調査

I 序章……………39

II 検出遺構の報告……………40

1. 古墳時代の遺構……………40
2. 飛鳥時代の遺構……………40
3. 近世の遺構……………43

III 出土遺物の報告……………46

1. 瓦類……………46
2. 土器類……………49
3. 木製品ほか……………63

IV まとめ……………64

図 表 目 次

図		
第1図	法隆寺若草伽藍中榭城復原図	6
第2図	昭和57年度までの検出遺構	7
	1.発掘調査で現われた川導水管	
	2.西室地区の遺構	
	3.律学院地区の石積遺構	
	4.推定北室の西雨落溝	
	5.東院の東西大溝	
	6.若草伽藍の西を画する柵	
第3図	発掘調査風景(SK5051 左、SX5170 右)	8
第4図	西内堂地区遺構図	9
第5図	第278西トレンチ(西から)	10
第6図	第278南北トレンチ(南から)	10
第7図	瓦窯SY5050・5060(東から)	11
第8図	経院及び西室周辺地区遺構図	
第9図	瓦窯SY5050・5060	13
	1.SY5060全景(北から)	
	2.同焼成室(西から)	
	3.SY5050全景(北から)	
	4.同焼成室	
第10図	第258トレンチ全景(東から)	14
第11図	SD5010(北から)	14
第12図	第259トレンチ全景(東から)	14
第13図	SD5030(北から)	14
第14図	第272トレンチ西半部(南から)	16
第15図	第262トレンチ全景(南から)	17
第16図	第273トレンチ全景(北から)	18
第17図	SX5226(南から)	18
第18図	第271トレンチ東半部(東から)	19
第19図	第271トレンチ西半部(東から)	19
第20図	第265トレンチ全景(東から)	20
第21図	第266トレンチ全景(南から)	20
第22図	第265・266トレンチ遺構図	21
第23図	第263トレンチ全景(北から)	22
第24図	SE5075(東から)	24
第25図	中門・南大門地区遺構図	
第26図	第262トレンチ全景(北から)	25
第27図	第268トレンチ全景(北から)	25
第28図	SX5157(南から)	25
第29図	SX5170	25
第30図	大浴屋・西大門間および中院西辺地区遺構図	
第31図	瓦瓦の変遷	28
第32図	SY5050・5060出土瓦	29

第33図	新型式の軒瓦	30
第34図	平瓦・熨斗瓦・鰯尾	31
第35図	SK5128・5125・5121等出土土器	32
第36図	SD5040・SK5066等出土土器	33
第37図	SK5046・5218・SY5050出土土器	34
第38図	SK5128・5066・第258トレンチ整地層出土土器	35
第39図	各トレンチ出土青銅製品とSX5060出土佐波理彫	36
第40図	発掘調査風景	39
第41図	調査地全景(上層)	41
第42図	調査地全景(下層)	41
第43図	SD6212(北から)	42
第44図	SD6160(西から)	42
第45図	SX6113(東から)	43
第46図	SD6124(西から)	43
第47図	SX6078埋蓋状況	44
第48図	SX6136(北から)	44
第49図	収納庫建設予定地発掘遺構図(上層)	
第50図	収納庫建設予定地発掘遺構図(下層)	
第51図	SE6127(南から)	45
第52図	SE6157(南から)	45
第53図	若草御懸出土の鰯尾	46
第54図	SD6160・6191出土瓦類	47
第55図	新型式の軒瓦	48
第56図	平瓦・熨斗瓦・特殊瓦製品	48
第57図	SD6160出土土器	50
第58図	SD6191出土土器	51
第59図	SX4560・SD6191出土獸脚円硯	52
第60図	SD6212・6214等出土土器	53
第61図	SD6130・SX6078出土土器	55
第62図	SD6124出土土器	57
第63図	SD6160出土土器	59
第64図	SD6191・6214出土土器	60
第65図	SD6130・SX6078出土土器	61
第66図	SD6124出土土器	62
第67図	調査地出土青銅製品とガラス玉・SD6130出土の埴と其の実測図	63
第68図	発掘調査位置図	

表

第1表	軒丸瓦分類表(1)	65
第2表	軒丸瓦分類表(2)	66
第3表	軒平瓦分類表(1)	67
第4表	軒平瓦分類表(2)	68
第5表	軒平瓦分類表(3)	69
第6図	昭和55・56年度発掘調査位置一覽表	70
第7表	昭和57年度発掘調査位置一覽表	71
第8表	昭和58年度発掘調査位置一覽表(収納庫予定地を除く)	72
第9表	各年度発掘調査面積及び調査期間(収納庫予定地を除く)	72

例 言

1. 本概報は、法隆寺における防災工事及び収納庫建設工事に伴う昭和58年度における発掘調査の概要をとりまとめたものである。
2. 防災工事およびこれに伴う発掘調査のため法隆寺防災工事委員会を設定し、太田博太郎・倉川文作・坪井清足・岸俊男・工藤圭章を委員に依頼し、その後工藤圭章の文化庁転出に伴ない、岡田英男に依頼した。昭和58年1月23日倉川文作逝去のため、後任を沼田隆に依頼した。発掘調査は奈良国立文化財研究所・奈良県立恒原考古学研究所・奈良県文化財保存事務所などが共同で実施した。
3. 本概報の作成にあたっては、編集小委員会を設け、高田良信、森郁夫、堀内啓男、亀田博がこれにあたり、本概報の構成を定めた。
4. 本概報に収録した昭和53年度から昭和55年度までの調査概要は、『奈良国立文化財研究所年報』1981、『奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査概報』昭和53・54・55年度、昭和55年度の調査概要は『奈良県遺跡調査概報(第二分冊)1980年度』を要約した。昭和56年度及び57年度調査については、『法隆寺発掘調査概報Ⅰ』・『同Ⅱ』にその成果を報告した。
5. 本概報の作成は、法隆寺防災工事委員会および発掘調査小委員会の指導のもとに、調査参加者がこれにあたった。法隆寺防災工事委員会委員で発掘調査小委員会の岡田英男には細部にわたって指導を受けた。執筆分担は下記のとおりである。
第一部 Ⅰ-1 堀内啓男(原文化財事務所)、Ⅰ-2 森郁夫(奈文研)、Ⅰ-3 亀田博(恒考研)、Ⅱ 亀田博、Ⅲ-1 毛利光俊彦(奈文研)、Ⅲ-2 西弘海(奈文研)、Ⅲ-3 工藤善通(奈文研)、Ⅳ 森郁夫
第二部 Ⅰ 森郁夫、Ⅱ 亀田博、Ⅲ-1 毛利光俊彦、Ⅲ-2 西弘海、Ⅲ-3 工藤善通、Ⅳ 森郁夫。
6. 遺構・遺物の写真は八幡扶桑(奈文研)・御幹雄(奈文研)・今西良男(原文化財事務所)が担当した。編集は森郁夫が担当し、石川千恵子(奈文研)・玉城妙子(恒考研)がこれに協力した。
7. 昭和58年度検出遺構図の縮図は主として玉城妙子・宮本裕史・西尾法子が行い、製図は玉城妙子が行なった。

第一部 法隆寺防災工事に伴う発掘調査

I 序 章

1. 防災工事

A 調査に至る経緯

法隆寺の防災施設は、明治45年の頃、黒板・関野両博士により、世界に比類なき文化遺産を守る急務を提唱されたのが始まりである。

その後計画は幾度か変更され、大正12年に至って機運も熟し、国庫補助金が認められ、同12年4月奈良県知事が法隆寺の委託を受け防火設備工事を実施することとなった。よって同13年2月防火設備事務所を設け、着々と準備を進め、同14年11月起工式を行い、総工費約30万円を以て昭和2年12月大体の工事を完了、同年4月盛大なる落慶式が行われた。この防火設備は自然流下式で当時古文化財の保護の防火設備としては、画期的な大事業であった。この防火設備も50年余を経て、各所に機能の低下が見られるようになった。

よってこの重要な遺産を一層完全に守るため防災施設改修の機運が高まり、法隆寺の要望により、文化庁も一段とその必要性を認識された。そのため昭和53年度に、幸い建造物の防災事業の特殊工事として、予算10数億、工期約6年の計画で、「法隆寺防災施設改修・一部増設工事」が着手出来る運びとなり、昭和53年7月22日最初の「法隆寺防災工事委員会」を開き、委員長に東京大学名誉教授太田博太郎博士が選出され、委員長外6名の委員を以て「工事計画及び実施に関する重要事項の決定」等に尽力することが決議された。次いで起工式は同年11月22日聖霊院に於て行われ、無事工事の完成が行われるよう祈願された。

B 昭和58年度までの防災工事の概要

法隆寺の昭和防災工事は、既設設備の改修と一部増設を目的とし、昭和53年に起工し順調に工事を進めて来たが緊縮予算の影響等により昭和60年度を以って終了の予定となった。今までの経緯を簡単に説明すると、昭和53年度は西院西面大垣内側に消火栓及び消防道路の設置、昭和54年度は低圧消火栓用中間槽(有効容量2,000m³)の設置、昭和55年度より警報設備・消火・避雷針各設備の本格的な改修工事を実施した。よって昭和55年度の自動火災警報・避雷針工事は西院廻廊の一部、上御堂・古材倉・収蔵庫附近、昭和56年度は聖霊院・東室東方・東院までの区域を実施した。消火栓工事は遺構精査保存のため多小遅れを生じた場合もあった。特に低圧消火栓用中間槽の当初計画位置においては、古墳が発見されたことによる設置場所変更のため、昭和54年度工事を繰越し、東院一郭では班鳩宮関係の重要遺構が予想されたため、調査精度を特に高める必要等から昭和56年度予定の消火栓工事は止むを得ず次年度へ繰越した。

昭和57年度は昭和56年度工事の繰越分を含めて東院関係、聖霊院・東室・食堂及び細殿を廻るルート、綱封藏南より実相院表門を経て東大門へ達する参道、北倉東より安養院表門

を沿り東大門へ達するルートが操越分の上なもので、57年度の消火栓工事は、聖蓋院前より中門前までと、実相院表門前より能石の階段に至る参道を施工した。また水源池である呵魔池及び取水塔の改修工事、境内防火池としての鏡池・弁天池の漏水部分の改修を行なった。更にこの年の8月3日には台風10号による豪雨により、法隆寺境内及び呵魔池周辺において保安林の地滑りによる大被害が続出し、その復旧が認められ、流出した昭和55年度完成の山林防火用消火栓及び倒壊した地藏堂北側上塙の復旧、併せて呵魔池周辺の上砂撤去を行なった。これらが昭和57年度までの概要である。

昭和58年度の工事は消火栓設備と避雷針工事が主たるもので、自動火災警報設備は東大門から東院に向う参道の東北端、福生院のみについて行なった。

消火栓設備については、西院延廊西側と西室北を廻り、宝珠院本堂及び中院東より西円堂石段下に至るルート、南大門より能石に至る参道と宝光院表門内側より明王院表門まで、能石階段前より西大門に通ずる参道及び大湯屋表門西より大湯屋に達するルート、また弁天池の周辺を廻る導水管、西円堂を廻る消火栓設備を行なった。この工事にともなう調査では特に大湯屋表門東北部の参道で「伏藏」の一つが発見されたり、西室北側に於ても中世の瓦葺2基が確認されるという発掘の成果があったが、消火栓設備については今年度を以って大過なく終了した。

その外消火栓設備関係では、低圧消火栓用中間槽の水量計を設け、防災管理室に於て一見して水量を知る設備が完備された。避雷針設備については、棟上避雷針として南大門・東大門・三経院及び西室・西門堂・羅漢堂・福園院・中院・宝珠院の各本堂を始めとして、その他の建物15棟を完了した。また従来境内に独立避雷針27基が存在したが、年を経て鉄柱及び文線が腐朽し危険な箇所がところどころに見受けられた。よって今回環境・効力上よりこの避雷針をすべて撤去、その代りに棟上避雷針を全建物約70棟に付け終った。しかし西院境内東北方にある円成院については、立地条件上この避雷針のみ独立避雷針として54年度に新設済みである。以上が昭和58年度工事施工の概要である。昭和59年度には、自動火災報知設備については西院御蔵の西端部分、本坊地区の機器の取付け、全体地ドケープルの入線、旧線を廃し新線と機器の結線、漏電警報及び非常警報設備等を行い、防災設備は59年度で大体完了し、昭和60年度は境内地の環境整備、排水溝の整備、消化道路の設置等を行う予定となっている。

この防災施設の内、消火栓設備に関する工事は最も比重が重く、発掘調査が特に重要視される。このため奈良国立文化財研究所と奈良県立橿原考古学研究所にこの調査を依頼して調査が進められた。なお今回の工事の組織は法隆寺を中心に、奈良県教育委員会が文化庁の指導のもとに工事を進め、設計管理は大東・藤谷設計事務所がこれに当り、「遺構の保存や重要事項の決定」等に関しては、防災工事委員会にはかり工事を運営した。

2. 昭和55年度までの調査概要

法隆寺防災工事にともなう発掘調査は、昭和53年度から始められた。ここではそのうち昭和57年度までの調査の概要を記す。⁴⁾

A 昭和53年度の調査

調査地は西院西面大垣の内側に沿った地域である。検出した主要な遺構は基壇建物1、築地1、井戸3、溝10、石垣1などである。これらは6期に大別でき、奈良時代から近世にわたる。天明年間の「伽藍境内大絵図」や寛政年間の「法隆寺惣境内図」によれば、この地域は子院西南院にあたる。検出した基壇建物は、絵図に示された西南院本堂の位置とは一致しないが、その規模からみて、この本堂にあたるものと推察できる。これが建てられた時期は、出土遺物から考えて平安時代後期に比定でき、このことは、西院の拡張が平安時代後期であるとの従来の説に付合している。鎌倉時代後半頃には、この地域は東西築地によって二分された。なお、当初のものであると考えられる西面大垣基底部の地覆石列を検出したが、層位的にみてその築成は近世に近い頃のようなのである。

B 昭和54年度の調査

調査地は、東院伝法堂西北地区、西院上御堂地区と地藏堂地区、そして寺域北方の梵天山地区である。

Ⅰ 東院地区 伝法堂西北での調査で検出した主要な遺構は、柱掘形、掘立柱櫓、井戸、土壇、溝などである。これらは3時期に大別できる。

第Ⅰ期の遺構は柱掘形で、奈良時代に至る以前と考えられるものであり、東院の方位より大きく西偏する柱掘形を南北に2個検出したが、塀か建物か不明である。

第Ⅱ期の遺構は井戸と掘立柱櫓であり、平安時代に属する。井戸は掘形が1.5×1.3mの小さなもので、井戸枠には直径0.55m×0.43mの曲物を2段いれ、その上に軒平瓦を4～5枚平積みにして井戸枠を四角く囲むようにしている。軒平瓦は6691A・142A・Cの各型式である。東西櫓は1間分を検出した。柱間寸法は3mである。柱掘形埋土から羽釜の破片が出ているので、これが平安時代後半に属することが明らかである。

Ⅱ 西院地区 上御堂地区では、溝や土坑を多数検出したが、いずれも中世や近世に属する。発掘区北端で検出した東西溝は溝幅を確認することはできなかったが(0.5m以上)、ある時期に西院伽藍の北辺を限った施設に伴うものと考えられる。

地藏堂地区では、溝、築地の基底部の石組、石列、土坑などを検出した。地藏堂に近接した地域は後世の整地上が厚く、1.5mをこえるところもあり、旧地表を検出することが困難なほどであった。築地基底部の石組や石列は、江戸時代に属するものである。

Ⅲ 寺域北方地区 寺域北方の梵天山地区に貯水槽を設ける計画があったのであるが、調査前の踏査によって計画地域に数基の古墳が発見されたため、梵天山から南下した支丘

鞍部の平坦地に計画変更となった。変更地での調査では、平行する2条の礎敷溝を検出した。溝幅0.5m、溝相互の距離は約1.4mである。これは近世の通路の側溝と考えられる。

C 昭和55年度の調査

防災工事が本格的に西院におよんできたことに伴い、発掘調査も西院全域にわたった。調査対象地は旧導水管埋設箇所と新管理設予定地であり、導水管に沿った長いトレンチを随所に設定して調査を進め、重要な遺構を検出した際には導水管迂回のため、遺構の範囲確認調査を行なった。以下に調査結果の要点を記そう。

Ⅰ 西室地区 当初の西室は西面回廊と現西室の間に営まれたと考えられている。この西室は承暦年間(1077~81)に北端一房を残して焼失したと記されている(『別当記』・『聖徳太子伝私記』)。第3トレンチ東辺で検出した南北溝(幅0.6m、深さ0.3m)は兩岸を川原石で護岸している。トレンチ北辺西端で一部を検出した東西溝は、さきの南北溝と連なるものであろう。これらの溝の隅隅の位置に丸瓦の凸面を上にして順次玉縁を重ねて組む遺構がある。類似した遺構は聖徳院で検出されており、墓壇の土留めと考えられている。また、東西溝を横断して丸瓦と平瓦を組み合わせた排水施設がある。以上の遺構は、当初の西室に関連する遺構に想定でき、また東西・南北に連なる溝を雨落溝と考えれば、北一房の一部を検出したことになり、当初の西室は東室とほぼ対称の位置に配されていた可能性がきわめてつよい。

Ⅱ 講堂東地区 大講堂の東は北室が営まれていた位置に推定されている(『聖徳太子伝私記』)。この地域で設定した第7・9・15・18の各トレンチで検出した東西溝や南北溝は一連のもので、建物をめぐる雨落溝と考えられた。そして第7トレンチで検出した掘立柱柵は、方位を異にする柱列で、柱間寸法2.4mの2間分を検出した。方位は若草伽藍の方位に近く、西院創建以前の遺構の可能性が強い。

Ⅲ 旧北面回廊 北面回廊は、当初講堂の前面で閉じるものであった。これは『資財帳』から推定され、昭和23年に行われた発掘調査で一部が確認された。旧導水管が旧回廊の位置に埋設されているため、回廊の再調査を行なった。設定した第10・18・19の各トレンチはともに後世の擾乱が著しく、墓壇はすべてに削平されていた。しかし、回廊の北雨落溝を検出、とくに第10トレンチではこの溝の凝灰岩製北側石の一部を検出し、南側石の痕をも確認することができた。南雨落溝は第10トレンチで確認した。これによって、回廊墓壇の幅を約6.5mの規模に復原することができた。

Ⅳ 現回廊 第23・25トレンチでは地山上に約30cmの版築土があり、南面回廊の第23トレンチではこの版築土中から平安初頭の須恵器甕が出土し、この頃に墓壇の部分的改修が行われたことがわかる。南面回廊南側の第26トレンチの地山高は、第23トレンチに比して約1m低く、造営に際して大規模な切土が行われたことがわかる。第24トレンチでは地山上に原堆積土があり、その上に約40cmの厚さで整地土をおき、約60cmの厚さで版築を行う。

現回廊基壇上面から地山面はでは約1.3mあり、回廊外の第22・29トレンチでも地山面までは同様の深さがある。整地土は両トレンチでも認められる。第22トレンチの現基壇下に、当初基壇の地覆石と考えられる凝灰岩列を検出した。北面回廊は大講堂と同じく地山削り出し基壇で、南側の第17トレンチの地山との差は約1mあり、ここでも大規模な切土が行われている。第40トレンチでは、地山上と版築土内に多量の焼土を認めた。焼土中から鉛滓が出土し、西面回廊付近で金属製品の製造作業が行われたことを示している。また、西面回廊外の第68トレンチではこの地域がもと谷間であり、西院造営時に大規模な整地が行われたことが知られた。

D 昭和56年度の調査

防災上場の進捗に伴い、発掘調査も広範囲にわたることとなった。昭和56年度の発掘調査は、過去3箇年とは比較にならないほど範囲が広く、西院伽藍から東院伽藍地域にわたることとなった。

Ⅰ 西院地区 聖霊院南側から大宝蔵殿に至る間の調査が上たるものであった。聖霊院南側では西院造営以前に存在した南北方向の大溝を検出し、これが西院造営中に埋められたことを確認した。綱封藏南側では政藏院や金剛院に伴うと見られる築地や道路遺構、あるいは井戸などを検出し、その下層からは奈良時代の掘立柱建物を検出している。

Ⅱ 東院地区 回廊内外と北室院境内とで調査を行なった。回廊内は、すでに解体修理工事に伴う発掘調査が行われているが、発掘範囲はほとんど旧管理施設範囲に限られた。東院西門から回廊東北隅にかけて検出した大溝は、東院創建以前の掘立柱建物群の方位にちかく、今後十分に検討しなければならない問題点となった。北室院境内では奈良時代以降、各時代の遺構が複雑に重複していた。奈良時代の遺構として東院伽藍の方位と一致する掘立柱建物を数棟検出し、東院伽藍の範囲を知る資料を得ることができた。

Ⅲ 中間地区 調査は、東大門東側の子院、律学院北側から開始した。ここから東院伽藍までの間は東西両伽藍の間にあたることから、中間地区と呼んだ。この中間地区は西院東大門から東院を結ぶ参道を境にして南北に分かれる。北面では主として各子院の裏庭にあたるため、中世以降に掘られた溝や土壇が複雑に重複していたが、それぞれの子院に伴う施設、たとえば泉池や築地などを検出した。参道の南側においても似たような状況であり、中世以降の溝・土坑・井戸などを多数検出した。

E 昭和57年度の調査

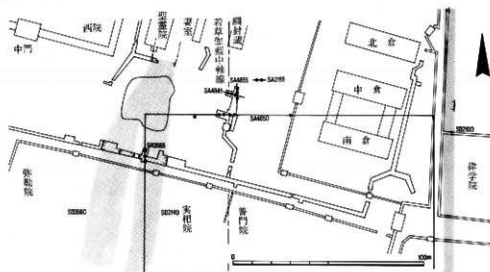
昭和57年度の調査も前年度と同じように年間を通じて行なった。調査地も東西両伽藍にわたるものであったが、主として西院伽藍での調査が多かった。

Ⅰ 西院地区 西院地区では、中心伽藍を除く東半部に調査は集中した。その結果、飛鳥時代以降の各時代の遺構を検出した。中でも、若草伽藍にかかわる掘立柱構、溝を検出したことは今年度の成果で特筆すべきものと言えよう。すなわち、食堂・綱封藏の南では

若草伽藍の方位(N17°40'W)にほぼ直交する掘立柱柵SA4850を検出した。この柵は、若草伽藍の金堂と塔の中心の北約106.2m(高麗尺300尺)にあり、若草伽藍中樞部の北を画する施設と考えられる。SA4850の北に若草伽藍に伴う建物遺構を検出しているため、若草伽藍域がさらに北方に広がっていたものと考えられる。また、若草伽藍中軸線の西44.5mの位置で柱根を残す掘立柱南北柵SA3555を検出した。この柵は幅10mをこえる谷筋の溝SD2140を埋めたてて設けている。若草伽藍中軸線と、SD3555までは高麗尺で126尺という中途半端な数値であるが、溝を迂回させたためと思われる。いずれにせよ、南北柵は若草伽藍中樞部の西を画する施設と考えられる。東大門と西大門とを結ぶ参道のちょうど中間点で、金箔と「和同開珎」を納めた土師器碗が出土し、西院伽藍完成時に行われた供養時のものと考えられた。

Ⅱ 東院地区 東院地区では、回廊外側をめぐる導水管予定地、舍利殿及び絵殿・伝法堂の東側、伝法堂北側等で発掘調査を行なった。トレンチ幅は原則的には1.5mであるが、伝法堂北側においては、伝法堂の解体修理にともなって行われた発掘(昭和14・15年)で斑鳩宮跡の遺構の存在を明らかにしているため、導水管の埋設位置を決定する意味あいから、トレンチ幅を3mで計画した。検出した遺構は古代から近世にわたり、斑鳩宮の方位に一致する掘立柱六列、平安時代の井戸、鎌倉時代の瓦竈などが主要な遺構である。

Ⅲ 中間地区 中間地区では羅漢堂北、中道院表門南西、善住院表門南と東側築地沿いで調査を行なった。中道院表門南西、すなわち聖徳会館北西部では若草伽藍の東限を示す溝の存在が予想されたが、明瞭な西屑を検出するに至らなかった。しかし全体的に砂が堆積しており、河川の氾濫のあったことが明らかとなった。その他子院に伴う井戸を2基検出している。



第1図 法隆寺若草伽藍中樞域復原図



1. 発掘調査で現われた旧導水管(西院)



2. 西室地区の遺構



3. 律学院地区の石積遺構



4. 推定北室の西雨落溝



5. 東院の東西大溝



6. 若草伽藍の西を画する欄

第2図 昭和57年度までの検出遺構

3. 昭和58年度の調査概要

昭和53年度から開始した法隆寺防災工事に伴う発掘調査は、今年度をもって終了した。今年度の調査地域は西院伽藍の西側で、西円堂周辺、三経院及び西室周辺、円明院跡周辺、大湯屋・西大門間、中門・南大門間などの各地区である。

発掘調査は昭和58年5月9日から開始し、年度末に至った。設定したトレンチは26箇所であり、発掘総面積は約1,314㎡である。

調査は従来どおり法隆寺が事業主体となり、奈良国立文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、奈良県文化財保存事務所法隆寺出張所が共同してこれにあたった。

本年度の調査は、5月～12月には水道管理設工事に伴うトレンチ調査を行い、昭和59年2月～3月には避雷針工事に伴う立会調査を行なった。避雷針工事に伴うグリッドは幅約1m、長さ約1.5m、深さ約3mであるが、これについては平面の略測と断面図を作成して、法隆寺の地層・地形復原の資料とした。

西院伽藍西回廊と西室間では旧西室の位置を確認するため3箇所にトレンチを設定し、中門前のトレンチでは、検出した柱穴列の西延長を確認するためトレンチを拡張した。

調査による出土遺物は、現場で応急整理のうえ奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部に搬送し、整理を進めていることは前年度と同様である。検出遺構・遺物についてはⅡ章以下に報告するとおりである。調査の進展に伴ない逐次法隆寺主催の共同報道発表を行なった。なお、現地調査参加者はつぎのとおりである。

奈良国立文化財研究所 岡田英男、工楽善通、金子裕之、松村志司、松井章、杉山洋、森郁夫、西弘海、千田剛道、山崎信二、巽淳一郎、山本忠尚、毛利光俊彦、岩永省三、深沢芳樹、宮本長二郎、上野邦一、亀井伸雄、山岸常人、田中哲雄、高瀬要一、本中真、内田昭人、八幡扶桑、佃幹雄。奈良県立橿原考古学研究所 亀田博。奈良県文化財保存事務所 堀内啓男、今西良男。調査補助員 玉城妙子、宮本裕史、西尾法子、佐藤純子。作業員 山田組社長 山田静夫ほか。



第3図 発掘調査風景(SK5051 左, SX5170 右)

Ⅱ 検出遺構の報告

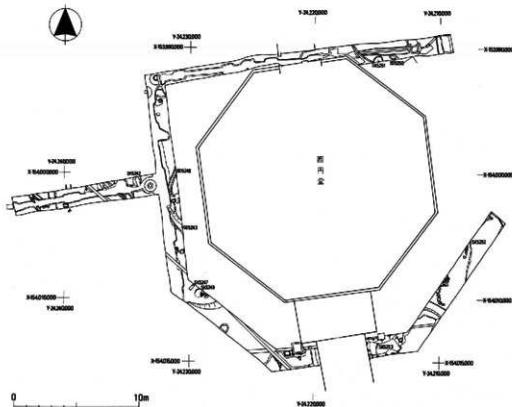
1. 西円堂周辺地区

昭和58年9月に西円堂の周囲をめぐる幅1.5mのトレンチ(第278トレンチ)を設定した。トレンチのうち北・西側は旧管の位置に重なり、その中央部分が攪乱を受けている他、各所に水道管・電線管・排水管が埋設され遺構の保存状態は悪い。

西円堂は南東に延びる舌状の丘陵上に造営されているが、調査の結果、西円堂の北東部には飛鳥時代の瓦を含む厚い整地層があり、南東部には中世以降の厚い整地層のあることが判明した。検出した溝・土坑のうち主なものについて述べる。

SD5250 西円堂と薬師坊庫裡の間で検出した斜行溝で、幅約45cm、深さ約7cm、平安時代の軒平瓦が埋土から出土した。

SK5251 西円堂と薬師坊庫裡の間で検出した長方形の土坑で、南辺はトレンチ外にある。幅約70cm、深さ約7cm。



第4図 西円堂地区遺構図

SD5248 西円堂の西側で検出した斜溝で幅30cm、深さ約20cm。西側は旧管掘方で切られている。近世の丸・平瓦が出土。

SK5242 西円堂の西側で検出した長方形の土坑で北辺はトレンチ外にあり、南辺は旧管掘方で壊されている。幅約60cm、深さ約25cm。

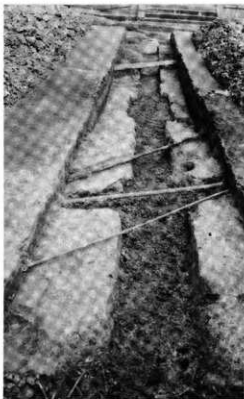
SD5243 西円堂の西側で検出した斜溝で幅約60cm、深さ20cm、西側は旧管掘方で壊されている。

SK5247 長さ約45cm、幅約20cm、深さ約30cmの長方形の土坑で、サスカイト剥片が出土。

SK5249 径約70cmの土坑で、東側はトレンチの壁にかかる。凝灰岩片と奈良時代の丸・平瓦が出土した。

SK5253 西円堂の南側で検出した楕円形の土坑で、現地表下約150cmの深さで検出した。北・南端はいずれもトレンチの外にある。幅約2m、深さ約40cmである。法隆寺142型式の軒平瓦が出土した。

SK5252 西円堂の東側で検出した土坑で、現表土下約1.3mでその東厨を検出した。トレンチ外に広がるため平面規模はわからない。深さ約20cm、瓦器片が出土し、中世頃のものと考えられる。



第5図 第278西トレンチ(西から)



第6図 第278南北トレンチ(南から)

2. 三経院及び西室周辺地区

三経院及び西室周辺地区では、導水管埋設予定地を7箇所の特レンチにおいて調査を行った他、旧西室の位置を確認するため3箇所の特レンチを設定した。特レンチの幅は1.5mであるが、検出遺構を確認するため一部拡張を行った。

A 第260・261・264・279特レンチ

西円堂と西室の間を通り、西円堂の南で南へ折れ曲がる。検出した瓦窯・土坑・溝などのうち主な遺構について述べていく。

SY5060 分焰鉢をもつ半地下式の平窯で、焚口・燃焼室・分焰孔・焼成室が良好な状態で残る。焚口の幅は約30cmで両側に丸瓦を立てる。燃焼室は幅約80cm、長さ約90cmで奥壁に分焰孔が3箇所あけられている。焼成室は長さ約1.4m、幅約1mで、壁面は床面から約1.1mの高さまで残っている。分焰鉢は2条で幅約20cm、高さ約15cmである。焼成室の東西両壁の分焰鉢と同じ高さの位置には段が作られている。窯の周囲に幅約35cmの素掘溝(SD5045)がめぐる。焼成室埋土から軒平瓦143D型式が、焚口埋土から軒丸瓦6135型式、軒平瓦6730A型式が出土した。

SY5050 SY5060の西側で検出した。分焰鉢をもつ半地下式の平窯で焼成室だけが残って



第7図 瓦窯SY5050・5060(東から)

いる。焼成室の幅は1.1mで、長さは約1.6mまで、側壁は床面から約1.1mの高さまで残っている。分焰床は2条ある。幅約20cm、高さ約10cmで上面には平瓦片が用いられている。焼成室の側壁の分焰床の高さと同じ位置には段がある。焼成室の埋土上層から近世の土師器小皿と瓦片等が多量に、下層からは軒平瓦143D型式、鴟尾片、多量の平瓦が出上した。

この2基の平窯は現在の西室に近接し、特にSY5050の焚口、燃焼室は西室背後の崖面の整形により破壊されたものと考えられる。この2基の瓦窯は遺物・窯型式からみて、鎌倉時代のものと考えられる。窯の検出により新管理設のルートは北側に変更され、窯は現状のまま埋めもどした。

SK5051 SY5060の東側で検出した大型の土坑である。南北幅約3.2m、東西幅約3.4m、深さ約70cmの逆方錐形で、底部近くから鬼瓦、瓦器片、軒丸瓦が出上した。窯の近くがあり、窯の操業に関する粘土採取跡と考えられる。

SD5041 石組の溝で、幅約26cm、深さ約11cmで南東方向に流れる。近世のものである。

SD5042 SD5041の延長線上に検出した近世の瓦と石列からなる遺構であるが、SD5041とは一直線にはならない。近世のものである。

SD5043 トレンチの東端で検出した。石組の溝の西側石列と考えられる。トレンチを東側へ約50cm拡幅したが、東側石列は検出できなかった。近世のものと考えられる。

SX5044 丸瓦を用いた上管で南東方向にのびる。近世のものである。

SK5037・5039・5046・5058・5059 土坑SK5051の東側で検出した土坑で径20～80cm。うちSK5058の底からは根石状のものが検出された。いずれも中世のものであろう。

SD5038 溝状の遺構で南へ下がる。中世のものか。

SK5052・5053・5054・5063・5070・5071 地山面上で検出した土坑で径30～70cm。いずれも近世のものと考えられる。

SD5061 ほぼ東西方向にのびる溝で幅約55cm、深さ約50cm。SD5062の下層遺構である。近世の軒平瓦・軒丸瓦、埴、磁器が出上。

SD5062 上管を石列で保護した遺構で近世のものである。この土坑の下層で幅約70cmの南北方向の溝を検出した。時期不明。

SK5067 東側の屑を検出した。底はゆるやかに南西に下がる。時期不明。

SD5255 幅約80cmの南北方向の素掘溝で、奈良時代の丸・平瓦等が出上した。掘込みの位置から近世頃のものと考えられる。

SK5256 径約90cmの土坑である。近代のものと考えられる。

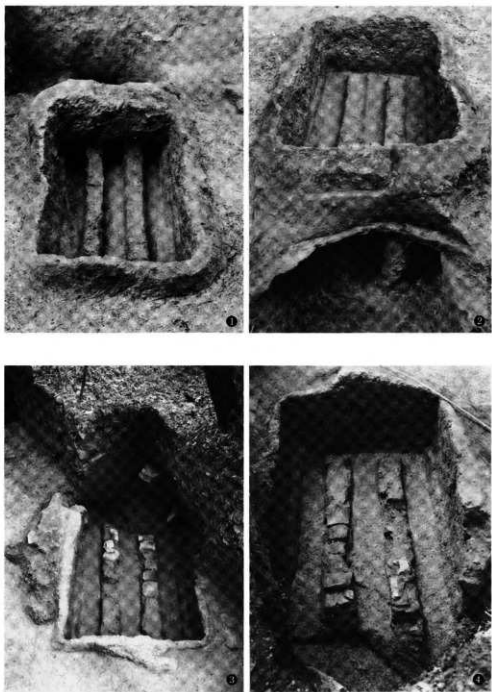
SD5069 東西方向の溝で幅約1.2m、深さ約40cm。中世のものか。

SK5064 径約90cmの土坑で深さ約30cm。近世のものである。

SK5066 南北幅約4mで東側はトレンチにかかる。現地表下約40cmの位置で確認した。深さ約140cm。奈良時代の土器・軒平瓦118型式、佐波理匙が出上(第8図×印)。



第 8 图 三教院及它西省周地区总平面图



第9図 瓦窯SY5050・5060

1. SY5060全景 (北から) 2. 同焼成室 (南から)
 3. SY5050全景 (北から) 4. 同焼成室 (南から)

SK5106 西壁はトレンチ外。南北幅約1.2m、深さ約30cmの土坑。近世であろう。

SD5109 東西方向の溝で、幅約2.2m、深さ約90cm。近世のものである。

SD5108 東西方向の溝で、幅約70cm、深さ約7cm。近世のものである。



第10図 第258トレンチ全景(東から)



第12図 第259トレンチ全景(東から)



第11図 SD5010(北から)



第13図 SD5030(北から)

B 第258トレンチ

西院御殿西面回廊と現西室間に設定した。後述する第259・272トレンチとともに旧西室を確認するためのトレンチである。主な遺構について述べる。

SD5010 幅約90cm、深さ約20cmの素掘りの南北溝で瓦の破片が堆積している。瓦には奈良時代と考えられるものが多いが軒丸瓦37Bが1点ある。この溝は昭和55年度の第3トレンチで検出された南北溝(SD01)の南延長線上にある。このSD01は幅約65cm、深さ約30cm、両側を河原石で護岸したもので、その北側で検出できた東西溝(SD02)とともに、承暦年間に北端一房を残して焼失したとされる西室の雨落溝と考えられた。

SK5018 トレンチの東端で検出した土坑で、電線管により切られている。深さ約20cm。飛鳥時代の瓦片及び軒平瓦116Aが出土。

SD5011 幅約35cmの斜行する溝で、深さ約10cm。時期不明。

SK5013 径約40cm、深さ約8cmの円形の土坑である。

SK5012 方形の土坑で北側はトレンチにかかり、西側は旧管により切られている。深さ約12cmである。

SK5008 南側はトレンチにかかり、西側は旧管で切られている。形状不明の土坑である。深さ約12cmである。

その他 トレンチ南壁沿いの位置で、長さ8.5m、幅約1mにわたりたち割り調査を行なった。地山は西から東へゆるやかに下がり、この場所は谷状の地形を整地したものであることが明らかとなった。整地層は大きく分けると上層から瓦器・灰釉陶器・須恵器片を含む灰褐色砂質土層、7世紀代の軒丸瓦(4A, 37C)の出土した灰色砂混り粘土層、8世紀代の瓦片や須恵器片を含む灰色炭混り粘土層にわけられ、地山は現地表下約3.3mの深さにある。

C 第259トレンチ

三経院と西院西面回廊の間に設定した東西トレンチ。主な検出遺構は溝・土坑である。三和土(漆喰土)旧管掘方から東側では三和土と考えられる灰色土の面を検出した。その範囲は、西端は旧管で切れ、東端は旧管掘方の層から約2m東の位置までである。この三和土の範囲の東端部では凝灰岩の小片が出土した。

SK5027 トレンチの北壁にかかる。1辺約35cm、深さ約4cmの長方形の土坑。三和土の面から掘りこまれている。

SD5030 幅約75cm、深さ約13cm。瓦片が堆積する溝状の遺構であるが層は明確でない。溝内には灰色砂質土が堆積する。位置的には第258トレンチのSD5010の南の延長線上にある。

SK5026 トレンチの東端で検出した形の土坑で径約30cm、深さ約7cm。

SK5025 トレンチの中央部で検出した形の土坑で径約60cm、深さ約15cm。

SK5024 トレンチの西端部で検出した土坑で南壁にかかる。幅約3m、深さ約30cm。地山まで掘込まれた大型の土坑で、埋土に焼土・炭・壁土・瓦片などを含んでいる。

SD5040 トレンチの中央部で検出した南北溝で、幅約50cm、深さ約20cm、溝の西岸には石が1個残存する。溝内からは西院御藍創建時の軒丸瓦、丸・平瓦が出土している。この溝は先述のSD5030よりは約50cm深い位置にある。

SK5031 トレンチのたち割で検出した土坑で、南壁にかかる。幅約60cm、深さ約20cm、須恵器片が出土した。

SH5028 先述の三和土（漆喰土）の範囲にあたる場所の下層から検出した小石・瓦細片を敷いた遺構である。

その他 この地域の地山は西から東へ深く下がり、トレンチの西端から約6mの所では表土約3.2mの所に地山があり、その間を、整地土で埋められていることが判明した。表土下約1.1mにある黒布色粘質土からは、飛鳥時代から奈良時代までの軒瓦が出土した。第258トレンチと同様、谷状の地形を整地して現在の地盤が造られたことが明らかとなった。

D 第272トレンチ

第259トレンチの南に設定した。旧西室雨落溝の東南の隅の検出を目的としたが検出することはできなかった。検出した遺構は掘立柱建物、土坑などである。

SB5201 東西3m、南北2mの1×1間の掘立柱建物で掘方の底には礎石を置く。この建物は中～近世のものと考えられる。

SK5205 柱掘方の底に石が置かれているが、SB5201の柱通りとは合わない。

SA5203 トレンチの西南部で検出した柱列で、東側の掘方内には柱根が残る。近代のものである。

SK5206 トレンチの北西隅部に検出した落ちこみで、深さ約30cm、瓦が出土した。

SK5197 トレンチの北壁にかかって検出した土坑で、深さ約10cm、近世のものであろう。

SK5207・5208・5210 径40～50cmの土坑で、トレンチの中央部で検出した。中世のものと考えられる。



第14図
第272トレンチ西半部(南から)

E 第267トレンチ

西院伽藍西面回廊の西側に南北に設定したトレンチである。昭和55年度の第20トレンチの南延長上にある。トレンチ北端には旧管の掘方があり、トレンチの西壁に沿って電線を保護する陶製のトラフである。トレンチを東西に横断するコンクリート・石組の3条の溝はいずれも近現代のものである。

SK5135・5136・5139 トレンチの南側・東壁にかかって検出した土坑である。近代の瓦を埋めた瓦溜である。

SK5134 地山面上で検出した瓢形の土坑で、深さ約20cm、土坑底部に堆積した砂利層から軒丸瓦・軒平瓦各1点、瓦器片が出土した。中世のものと考えられる。

SK5137 径約40cm、深さ20cmの土坑である。埋土から瓦片が出土した。中世のものと考えられる。

SK5141 近代の石垣の下に入る土坑で、深さ約20cm、埋土は灰色炭混り粘土である。中世のものと考えられる。

SD5138 溝状の遺構で西側を検出した。深さ約15cm。灰色粘土で埋り、奈良時代の丸・平瓦片が入る。

その他 トレンチ内における地山の状況は北と南では大きく様子が異なる。X-154.063mあたりから北側では、おおむね表土下40～60cm程で地山となるが、それより南側では地山が大きく下がり、谷あるいは池状の様相を呈する。この谷状の地形はさらに幅1.5mのトレンチ内でも東から西へ下がりが見られ、この部分が東岸にあたるのがわかる。第258・259トレンチで検出した谷状の地形の西岸に対応するものであろう。現地表下約60cmまでは中世以降の土層であり、それ以下約1.7mまで西院伽藍造営時と考えられる整地層が認められる、さらに無遺物のシルト層がつづく。整地層の中から西院伽藍創建時の軒丸瓦2点、軒平瓦3点などが出土した。



第15図
第262トレンチ全景(南から)

F 第273トレンチ

宝珠院の築地の東側に設定したトレンチで、北端からは東へトレンチがのび、南端からはトレンチが東へのび第271トレンチにつづく。検出した遺構は中世から近世のもので、溝・土坑・埋変等がある。

SD5221 南北方向の溝状の遺構で、幅約1.6m、深さ約40cm。西院創建時の軒瓦、中・近世軒瓦、近世陶磁器が入る。近世のものと考えられる。

SK5222 浅い土坑状の窪みで広く西から東へ下がる。この土坑からは土師器小皿が多量に出土した他、額面に忍冬文をへら描きした軒平瓦、近世軒丸瓦等が出土した。近世の遺構と考えられる。

SD5214 幅約20cmの東西方向の溝状遺構で、土管埋設のための掘方と考えられる。近世のものと考えられる。

SK5218 1辺約2mの方形の掘方の内側にコ字状に石を並べ、その中に径約90cm、断面半円状の土坑を設ける。軒平瓦・瓦器碗が出土した。中世のものと考えられる。

SD5216・5217 トレンチを斜行する溝状の遺構で、SD5216は幅約25cm、深さ cm、SD5217は幅20cm、深さ約5 cm、近世のものか。

SX5226 トレンチの南半で検出した階段状の遺構である。北側には石列が一行あり、その北側には瓦が敷かれている。南側では鍵形に並ぶ石列がある。うち南北に並ぶ石列が階段の西端でその西側は溝状になり、素掘りの溝は南へ延びている。東西に並ぶ石列の南約1mの所に東西に並ぶ石列の抜取跡がある。中世の土器を含む整地土の上に作られている。近世のものか。

その他 地山は全体にゆるやかに北から南へ下がるが、X-154.085あたりから急に現地表下約1.7mまで下がる溝状の遺構がある。この下がりには瓦器を含む整地土で埋められ、整地土の上に先述の階段状遺構SX5226が作られている。



第16図 第273トレンチ全景(北から)



第17図 SX5226(南から)

G 第271トレンチ

三経院の南側に設定したトレンチである。土坑など検出した。

SK5181 径約50cm、深さ約30cmの土坑で、瓦器椀片が出土。中世のものと考えられる。

SK5182 トレンチの南壁にかかる土坑で、幅約80cm、深さ32cm、瓦器椀片が出土。中世のものと考えられる。

SK5183 トレンチの南壁にかかる土坑で、幅約60cm、深さ約20cm、瓦器椀片が出土。中世のものと考えられる。

SK5186 トレンチの南壁にかかる大形の土坑で、SK5185が重なる。幅約3m、深さ約12cm、瓦器碗片が出土した。中世のものと考えられる。

SK5185 トレンチの南壁にかかる大形の土坑で、幅約2.5m、深さ約30cm、瓦器椀片が出土した。中世のものと考えられる。

SD5184 トレンチを斜断する溝状の遺構で、幅約50cm、深さ約15cm、瓦器片の入った暗灰色土を切って作られている。

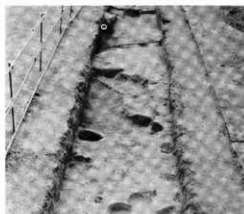
SK5192 礎の入った土坑で、径約60cm、深さ約10cm。

SD5188 南北溝で、幅約60cm、深さ約15cm。瓦器椀が入る。中世のものと考えられる。

その他 このトレンチ内における地形および整地についてふれておきたい。トレンチの中央部はおおむね表土下約50cmで地山となるのに対し、トレンチの両端部は深く地山が下がる。東側の地山の下がりとはトレンチの端から約11mの位置から始まり、東へ急峻に下がり、トレンチの東端部では表土下2m以上の深さになるようである。この地山の下がりとは西院伽藍創建時の整地層で埋められ、この整地層中から軒瓦・青銅滓・須恵器・土師器・ふいご羽口等の遺物が出土した。西側の地山の下がりとはトレンチ西端から6mのあたりからはじまり、ゆるやかに西側に下がり、トレンチの西端あたりでは表土下約1.5mに地山がある。この下ごりは主に瓦器を含む土層で整地されている。



第18図 第271トレンチ東半部(東から)



第19図 第271トレンチ西半部(東から)

3. 円明院跡周辺地区

宝珠院の北側、円明院跡に東西トレンチを、さらに築地の西側に「く」字形のトレンチを設定した。

A 第265トレンチ

円明院跡に東西方向に設定したトレンチで、近世の築地跡と側溝、飛鳥時代の掘立柱穴などを検出した。

SA5120 トレンチの中央部で検出した2条の溝にはさまれた幅約1mの遺構。東側には石列が伴う。東側の溝は幅約1.5mで浅い。西側には幅約1mの素掘り溝SD5118が伴い瓦器破片が出土。築地状の遺構と考えられる。

SD5111 南北方向の素掘溝で、幅約20cm、深さ約10cm。近世の土師器小皿が出土。

SD5112 南北方向の素掘溝で、幅約30cm、深さ約10cm。土師器小皿が出土した。近世か。

SD5113 幅約60cm、深さ約10cmの斜行する溝である。溝内には砂・灰色粘土が堆積していた。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世と考えられる。

SK5115 トレンチの東端部で検出した土坑で、径約40cm、深さ約25cm、遺物は出土しなかった。

SK5116 トレンチの南壁にかかる不整形な土坑で、幅約25cm、長さ55cm以上。遺物は出土しなかった。



第20図 第265トレンチ全景(東から)



第21図 第266トレンチ全景(南から)

SK5119 トレンチの西部で検出した土坑で、トレンチの南壁にかかる。東側は削平されているが、SD5112・5113の下におよぶ。

SB5110 トレンチの中央部下層から検出した掘立柱の遺構である。柱掘方は1辺約80cmの方形で鋸形に並ぶ。建物の南妻部分と考えられる。南北の柱間は約1.8m、東西の柱間は約1.5mである。掘方の周辺からは7世紀中頃の須恵器・土師器が出土している。

SK5121 柱穴により切られる1辺約50cmの方形の土坑である。

SK5124 1辺約60cmの方形の土坑である。SB5110とは一致しない。

B 第266トレンチ

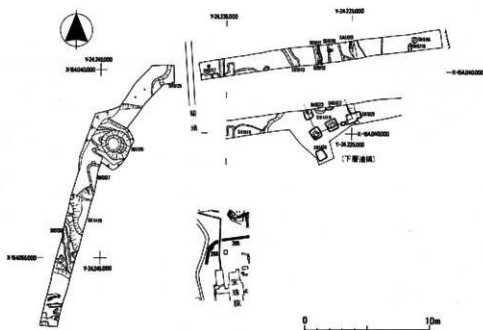
築地の西側に「く」字形に設定したトレンチで西方院跡にあたる。

SK5125 トレンチの北端で検出した土坑で、規模不明、深さ約70cm、7世紀と考えられる須恵器杯片が出土した。

SK5128 トレンチの中央部で検出した土坑である。地山を掘り込んだ土坑内には灰茶褐色土が堆積し、7世紀と考えられる須恵器杯片が出土した。

SE5126 井戸の輪郭を明らかにするため一部トレンチを拡張した。井戸は円形素掘りで検出面での直径は約2.1m、検出面下3mでは直径約1mになる。井戸枠は残存しない。この井戸の上面は中世の瓦・土師器を含んだ暗茶褐色土が堆積していた。出土遺物から近世のものと考えられる。

SK5130 トレンチを斜断する溝状の土坑で、幅約40cm、灰色の砂質土で埋まる。途中の広がった部分は史跡標柱の掘方。



第22図 第265-266トレンチ遺構図

4. 中門・南大門中間地区

西院回廊の南西隅から南東に第270トレンチを設定した。第263トレンチはそれにつづき南へ伸びる新管埋設に伴うものであるが、柱列が検出されたため、東・西に拡幅を行った。第269トレンチは昨年度の第251トレンチの西側につづくトレンチである。このトレンチでは「伏蔵」が検出されたため、新管ルートを南側に迂回させ、それに伴うトレンチも南側へ折れ曲がった。第268・283トレンチは能石・南大門間の新管埋設に伴う調査であるがこのトレンチから西に伸びる第274・275トレンチは遺跡の有無を確認するため設定したもので、新管のルートではない。いずれも顕著な遺構は検出できなかった。第262トレンチは明王院跡に設定したトレンチで、近世の井戸跡および中世の土坑が検出できた。第283トレンチでは南大門の室町時代焼失時のものと考えられる焼土層と遺物を検出した。

A 第270トレンチ

回廊の南西隅から「く」字形に中門前に伸びるトレンチで、東半分は旧管掘方とほぼ完全に重なり、遺構が検出できたのは西半分である。

SD5171 トレンチの北端から南東に伸びる石組遺構である。石積で護岸した溝の西肩と溝の中に埋めた土管からなる。現在も西院伽藍西面回廊の西側を流れる溝の延長にあり、石積溝を廃し土管にかえたものである。近世のものである。

SD5112 幅約30cm、深さ約10cm、トレンチを斜断する素掘りの溝状遺構である。遺物は無い。

SD5173 ほぼ南北方向の素掘り溝状遺構で、幅40cm、深さ約20cm。遺物は出土しなかった。



第23図 第263トレンチ全景(北から)

B 第263トレンチ

中門前と能石間に設定したトレンチで、東西方向の柱列が検出されたため、トレンチを西および東に拡幅した。

SA5091 東西方向の柱列である。柱掘方は一辺約40cmの方形、柱は径約10cmで比較的細い。柱間は約3.9mである。この柱列は回廊の南側柱列から約29.4m南にある。柱穴から近世の碗片が出土。

SA5092 SA5091の南約2.9mで検出した柱列で、掘方は1辺約20cm、柱跡を5箇所検出した。

SA5093 東西方向の柱列で、柱掘方は径約40cmの不整形。柱は径約10cm。SA5091・5092とは平行にならない。

SK5090 トレンチの中央部で検出した土坑で、径約1.3m、深さ約10cm、黄色砂質土で埋る。

SK5102 径約30cmのピット。

SK5103 径約35cmのピット。

SX5101 トレンチの南端で検出した溝状の土坑で幅約40cm、長さ約2.2m、深さ約30cm、文字瓦を含む近世の瓦が出土した。

C 第268・274・275・276トレンチ

南大門・中門間で、東南隅築地に沿ってトレンチを設定し、3箇所で西側へトレンチをのばした。このトレンチでは地山が比較的浅く、北では表土下約30cm、南では約60cmで起伏しながら南へ傾斜している。遺構は地山面上で検出したが、多くは近世から近代のもので、東南隅築地に沿って長く延びる2条の柱列や第274トレンチの西部で検出できた小土坑は、遺物から近代のものと考えられる。

SK5148 大形の土坑で幅約4m、深さ約30cm。飛鳥時代から奈良時代の瓦・土器が出土。

SK5150 トレンチの南壁にかかる。径約70cmの瓦溜で、近世のものと考えられる。

SK5158 トレンチ西の近世暗渠で切られている径約2m、深さ約25cmの土坑で、羽釜片等中世の遺物が出土した。

SK5146 径約50cm、深さ約5cmの土坑である。時期は不明。

D 第283トレンチ

第268トレンチの南への延長線上に設定したトレンチで、南大門の北辺に近接する。トレンチの中央に東西に旧管が埋設されている。現表土下約1mで地山となるが、遺構のない部分では地山面上に20～40cmの厚さの瓦器片を含む整地層があり、その上に焼土層がある。焼土層からは青磁片・軒丸瓦(平安時代)・軒平瓦(奈良時代)などが出土した。

SK5267 焼土面から掘られた径約50cmの土坑で底に瓦を敷く。

SK5266 トレンチの南東隅にかかる土坑で、焼土面から掘られている。

SD5269 斜行する幅約50cm、深さ約20cmの溝状の遺構で、古墳時代の土器が出土。

SK5270 トレンチの西壁にかかる土坑で、幅1m以上。

SK5268 トレンチの南壁にかかる土坑状の遺構で、深さ約30cm、飛鳥時代の土師器・須恵器が出土した。

E 第262トレンチ

西南隅築地の内側に南北方向のトレンチを設定した。江戸時代初期の「伽藍境内大絵図」によれば現在の宝光院は威徳坊で、築地を境いにして北に明王院が位置する。寛政9年(1797)の「法隆寺惣境内之図」では宝光院は現位置にあり、明王院の場所には観学院があつて、その北には明王院が位置する。宝光院と勸学院は築地を境いとするが、勸学院と明王院の間には築地が築かれていない。勸学院は18世紀後半に焼失したと伝えられる。この調査において検出した遺構は中世から近世の土坑・井戸などである。

SE5075 トレンチの中央部で、トレンチの西壁にかかる井戸を検出した。上面での掘方径は約3m、掘方から約2.2m下に鍵型に曲がる石列がありその上に木材が置かれていた。井戸埋土から巴文軒丸瓦等が出土した。近世のものと考えられる。この井戸の北側に井戸掘方より古い掘方が見られた。

SK5089 トレンチの南部の下層で検出した土坑状遺構で、東・西はそれぞれトレンチにかかる。深さ約20cmで、中世と考えられる土器が多量に出土した。

その他 トレンチの北端と南部に石列が見られた。いずれも近世のものであるが、土塚に関連するものとも考えられる。トレンチの中央部では不整形な土坑(SK5077・5076・5078・5086・5087・5082・5083・5088)が地山面で検出された。またこの上層では石列が3箇所認められた。

F 第269トレンチ(東半部)

能石階段・大湯屋間に設定したトレンチで、途中、石組遺構SX5170が検出されたため南へ折れまがる。おおむね表土下の比較的浅い位置で地山が検出されこの地山面上に中～近世の土坑・溝等の遺構が検出された。

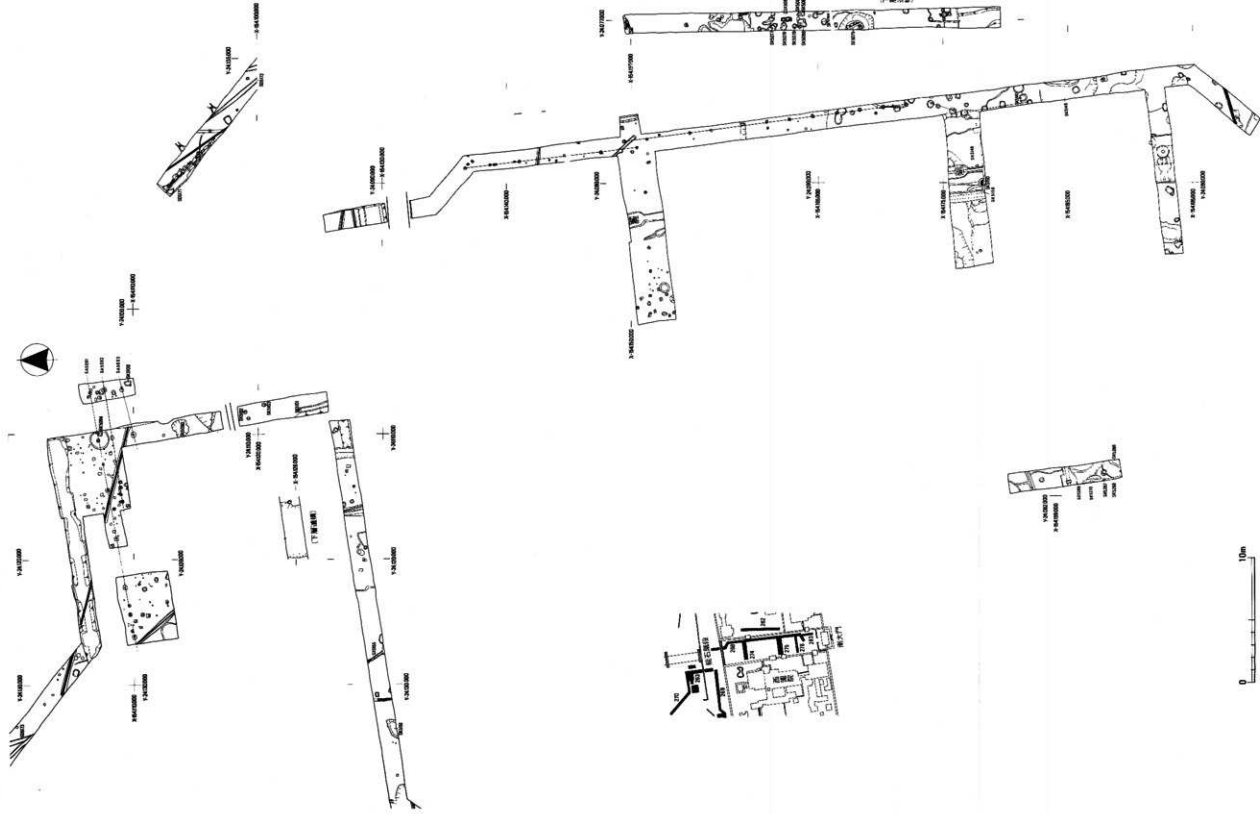
SX5151 トレンチの南壁にかかる土坑で幅約1.5m、焼土混りの黒褐色土で埋っている。

SX5155 トレンチの中央部で検出した土管を列べた遺構で近世のものと考えられる。

その他 トレンチの西端から2mの位置で検出した南北溝は幅約1mで深さ20cm。同西端から7mの位置で検出した南北溝は水道管の掘方と重なっていて幅は明確ではない。時期不明。



第24図 SE5075(東から)



第25圖 中門·南大門地區濠南區



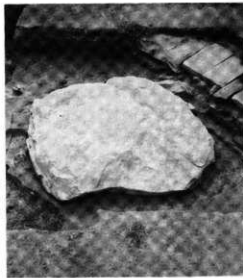
第26図 第262トレンチ全景(北から)



第27図 第268トレンチ全景(北から)



第28図 SX5157(南から)



第29図 SX5170

5. 大湯屋・西大門間および中院西辺地区

A 第269トレンチ(西半部)

能石階段・大湯屋間に設定した第269トレンチの西側部分である。このトレンチでは石組遺構を検出した他、上の中～近世の土坑・溝等を検出した。

SX5170 大湯屋の門の北側で検出した石組遺構である。南北幅約2.4m、東西幅2mの扁平な石の側面に一部加工を施す。北・東辺で掘方を検出した。石の上面は現地表下約10cmの深さにあり、石組の溝(SD5157)の東岸の石列の北延長と考えられる石列が石の西辺下にある。SX5170は「古今・陽集」に、三伏蔵の一つが浴室の前であると記している中に見える大石が、これに相当するものと思われる。

SD5133 東西方向の素掘溝の北岸を検出した。SD5154に切られている。

SD5154 南北方向の素掘の溝で幅約1.5m、深さ約50cm。砂が互層に堆積している。

SD5174 南北方向の素掘溝で幅約1.5m、深さ約50cm、地山を掘りくぼめた遺構内からは須恵器片が出土した。

SD5160 SD5157と一連の遺構で北から南へ流れる流路の東岸と考えられる。遺構内には砂が堆積し、近世と考えられる土師器小皿が出土した。

SD5157 両岸を大型の石で組み上げた溝で、幅1m、深さ約80cm。西岸の延長部が石組遺構SX5170の石に見られるが、その北部では後世の暗梁により破壊されている。埋土から瓦器片等、中世の遺物が出土した。この溝の上層には近世の溝SD5161がある。

SX5168 表上下約30cmで検出した南北方向に瓦・石を敷き列べた遺構で近世のもの。

SX5169 表土下約50cmで検出した。瓦質の土管を並べたもので、5個分検出している。排水のための施設で近世のものと考えられる。

SD5152 表土下約70cmで検出した鍵形の溝状遺構で深さ約30cm、白磁片等が出土した。

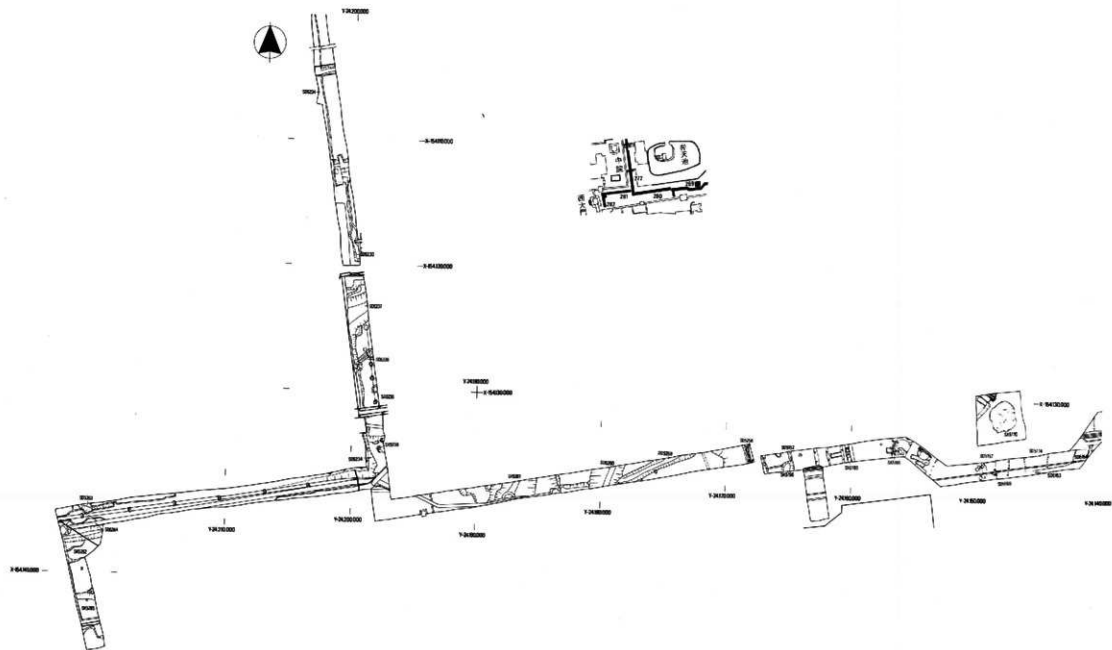
SK5156 トレンチの南壁にかかって検出した土坑で、現地表下約70cmで検出した。幅約1m、深さ約60cm。瓦質土器片などの遺物が出土した。

その他 大湯屋の門の北側あたりで地山が最も下がり(現地表下約1.8m)、それぞれ東西にゆるやかに上がることが明らかとなった。これは西院回廊と西室間で検出した谷状地形の南部にあたると思われる。しかしここでは西院伽藍創建時と考えられるような整地層は認められず、かなり後まで谷状の地形が残ったらしい。

B 第280トレンチ

中院築地南東隅部から東へ設定したトレンチで第269トレンチにつづく。土坑・溝状の遺構等を検出した。

SK5261 幅約3.5mの土坑状の遺構であるが北・南側はトレンチにかかる。深さ約80cm。黒褐色土で埋められ、瓦器片・青磁片が出土した。中世のものと考えられる。



第30図 大湯屋・西大門間および中院西辺地区遺構図

0 10m

SD5260 幅約2.5m、深さ50cmの素掘の溝状遺構である。古代のものか。

SD5258 石積で護岸した溝のうち西岸を検出し、一部東岸を確認した。幅は49cm、深さ約30cm。近世の遺構である。

C 第277トレンチ

中院の築地の東側に設定したトレンチで第273トレンチの南延長にあたる。このトレンチでは中世～近世の溝跡、近代の柱列などの遺構が検出できた。

SD5234 トレンチの西辺沿に南北方向に検出した素掘の溝状の遺構で中院の築地に沿って西へまがり第281トレンチのSP5263につづくものと考えられる。北端は第273トレンチの石段状の遺構(SX5225)の西辺につづく。東岸を検出しただけで幅は不明、南へ下がるに従って深くなる。土師器片・瓦器片などが出土した。中世のものと考えられる。皿

SD5233 トレンチの中段で検出した素掘りの溝状遺構で、「乙」字形に折れ曲がる幅約1.7m。平安時代の軒平瓦(142-B型式)が出土。

SD5237 東西方向の素掘りの溝状遺構で幅2m、深さ約80cm。

SX5236 東西方向の石列である。瓦器片がみられ中世以降のものである。整然とは並ばず遺構の性格は不明。

E 第281トレンチ

中院の南側の築地の南辺に設定したトレンチで溝状遺構・土坑などを検出した。

SD5263 第277トレンチのSD5234が西に折れ曲がりSD5263になる。ちょうど旧管の下が溝の南岸になるが北岸は検出できず幅は不明。深さ40cm以上である。トレンチ西端部で北へ折れ曲がるものと考えられる。埋上から瓦器片が出土し中世のものと考えられる。

SD5264 トレンチの西端部で検出した東西方向の溝で幅約1m、深さ約30cm。SK5264の下から検出された。

SK5264 南北幅約3m、深さ約40cmの土坑で焼土と瓦で埋められていた。所謂瓦溜で瓦は近世のものである。貞享元年(1684)11月5日の西大門焼失時のものと考えられる。

E 第282トレンチ

西大門の東辺に設定したトレンチであるが顕著な遺構は検出できなかった。地山は表上F35cmで検出できた。

SK5265 焼土や瓦の入った土坑状の遺構で規模不明。北から南へ下がり、深さは約20cmである。近世のものと考えられる。

註

1) 従来の発掘発掘成果については、『法隆寺発掘調査概報Ⅰ』（昭和57年）、『同Ⅱ』（昭和58年法隆寺発掘調査概報編集委員会）を参照されたい。

2) 軒瓦の型式番号は「南都七大寺出土軒瓦型式一覧(1)法隆寺」奈文研(昭和58年)による。

Ⅲ 出土遺物の報告

1. 瓦 類

昭和58年度の調査では軒瓦368点、鷓尾4点、鬼瓦21点、獅子口3点、鬘斗瓦1点のほか多量の丸・平瓦が出土した。これらは飛鳥時代以降、各時代にわたる。ここでは西院伽藍造営に伴う整地土と、瓦窯SY5050・5060とから出土した瓦類及び今回はじめて出土した新形式の軒瓦などについて記述する。なお、軒瓦の内訳は巻末に一覧表を付した。

A 西院伽藍創建整地土出土瓦

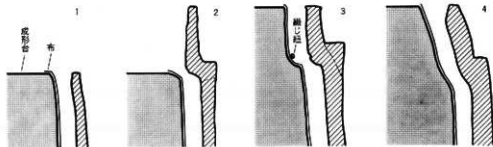
回廊南西隅近くに設定した第271トレンチでは、西院創建時の整地土と考えられる炭混り黄灰色砂質土から軒丸瓦37A、軒平瓦116B・C各1点と、丸・平瓦が少量出土した。

軒瓦37-116は西院伽藍創建時の組み合わせで、標式は37A-116Aである。116Bは量が少ないが、116Cはこれまでの調査で最も多く出土し116Aをしのぐ。116Cは中心飾のなかに遊線があることなどから116A・Bにやや後出すると考えていたが、今回の出土状況や全体的な出土量から西院伽藍の造営期間中に多量に使用されていたことがわかる。

丸瓦は玉縁がつき、凹面の玉縁の付け根に縦圧痕がある。この丸瓦は胎土や大きさなどから軒丸瓦37に伴うと考えられる。ここで丸瓦の変遷について触れておこう(第31図)。

これまでの調査で行基丸瓦(1)は飛鳥時代の軒丸瓦4Cに、玉縁丸瓦の初現(2)は同じく飛鳥時代の軒丸瓦3B・Cに伴うことが明らかである。後者の玉縁は別粘土を本体に接合し凸・凹面をもナデ調査する。布目は玉縁に至らず、行基丸瓦の成形台を用いた可能性が強い。玉縁の付け根に縦圧痕がある例(3)は玉縁と本体を一連でつくり、凸面の肩は別粘土を貼り付けて成形する。丸瓦本体から玉縁への移行はかなり急角度であるため、縦圧痕で布を締め込む必要があったのであろう。布目が荒く平安時代と考えられる丸瓦(4)は玉縁の凹面に縦圧痕がなく、本体から玉縁への移行もなだらかなる。類例は法隆寺所蔵の軒丸瓦54Bに認められ、こうした変化は奈良時代に遡ると考える。

平瓦は凹面に横骨痕や布の合せ目を残す桶巻き作りである。凸面は縦あるいは横方向にナデ調整する。斜格子叩き目を施す平瓦(第34図1)があり、これは飛鳥時代に属す。



第31図 丸瓦の変遷

B 瓦窯SY5050・5060出土瓦(第32図)

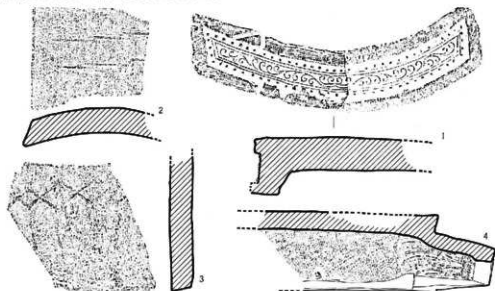
第261トレンチで検出した平窯SY5050・5060の主として焼成室から整理平箱で各々約20箱分の瓦が出土した。ともに埋土の上層には近世の瓦を含むが、それ以下には古代及び中世に属す少量の軒瓦と丸瓦などのほか、焼け損じと思われる多量の平瓦が投棄されていた。ここでは瓦窯の操業に関連する瓦について記す。

軒平瓦143D(1)は戴手状の中心飾をもつ4回反転の均正唐草文軒平瓦である。軒平瓦143はA~D種があり、D種は内外区の境に二重の界線をめぐらせるのが特徴である。段頸で、平瓦部の凹・凸面とも丁寧に縦ナデを施す。両窯の焼成室から各1点出土。

平瓦(2・3)は143Dと同様にいずれも厚手(2.5~3.0cm)で凹・凸面とも縦ナデを施すが、調整が不十分なために凹面に細かい布目、凸面に荒いX字文と平行叩き目の残るものが少量ある。凹・凸面とも離れ砂が付着している。

丸瓦(4)は凸面に縦ナデを施すが、一部に縦位の細かい縄叩き目が残る。凹面は未調整で布目と糸切痕が残る。玉縁部の凹面端部が突出する点は特異で、布の末端を袋綴じにしていたことが窺える。

軒平瓦143Dの叩き目は不明だが、法隆寺所蔵の軒平瓦143Aには荒いX字文叩きが認められる。この叩き目は今回多量に出土した焼け損じと思われる平瓦の叩き目と同種であり、軒平瓦143Dと平瓦とがほぼ同期の所産であることを示す。また、丸瓦は縄目の細かさや玉縁端部の特徴が法隆寺所蔵の軒丸瓦51Aと一致する。昭和35・36年に実施された法起寺境内における瓦窯の調査では、軒丸瓦51Aと軒平瓦143Bとの組み合わせが明らかにされ、瓦窯の操業が弘長二年(1262)の塔修理に係るものと推測されている。SY5050・5060の操業年代もこれに近い時期に比定できるよう。



第32図 SY5050・5056出土瓦(1:4)

C 新形式の軒瓦(第23図)

(1)は外区に珠文をめぐらせた複弁蓮華文軒丸瓦で44Bと同范である。44は部位の異なる2片について仮にA・B種に区分したが、今回出土した資料からみて同種である可能性が強くなった。中房が大きく、蓮子を二重にめぐらせることから白鳳時代に比定できる。

(2)は外区に珠文と線鋸歯文をめぐらせた単弁蓮華文軒丸瓦で、平城宮出土の6135Bと同范である。法隆寺では平城宮と同范のA種が既に出土しているが、B種は初出である。A種は12弁で蓮子1+6、B種は13弁で蓮子1+4。ともに平城宮出土軒瓦編年Ⅱ期(養老5年~天平17年)に比定できる。

(3)は外区を素文とする唐草文軒平瓦で、今回はじめて出土した。文様の酷似するものが平城薬師寺から出土している。それによれば花頭形の中心飾をもつ4回反転の均正唐草文となる。法隆寺例は唐草文の第4単位の途中に脇区界線があり、上下区の界線も脇区に及ぶことから范を切り縮めていると考える。曲線頸で、凸面には縦位の繩叩き目、凹面には布目と糸切痕が残る。時期は平安時代になろう。

D その他の瓦(第34図)

各トレンチから出土した飛鳥時代の平瓦6種と、若干の道具瓦などを紹介しておく。

これまでの調査によって飛鳥時代の平瓦は桶巻き作りで凸面を丁寧に縦ナデ調整するものが多いが、格子叩き目の残るものや端面を凹凸にした板状工具でカキ目調整しているもののあることが判明している。今回の調査では格子叩き目3種、平行叩き目1種、カキ目調整するもの2種が認められた。



第33図 新形式の軒瓦(1:4)

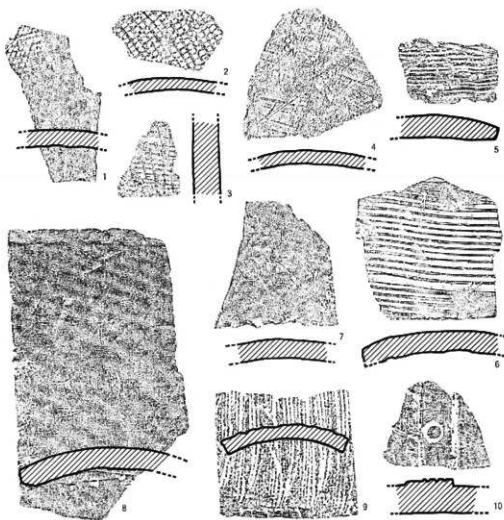
斜格子叩き目平瓦(1)は凸面を縦及び横方向にナデ調整する。凹面は未調整。格子は4×5mm前後(A種)。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ1.6~1.8cm。正格子叩き目平瓦A種(2)は格子が1辺4~6mmとほぼ方形である。凹・凸面とも未調整。硬質で淡褐色を呈する。厚さ1.2~1.4cm。正格子叩き目平瓦B種(3)は格子が3×7mm前後の長方形である。凹面には布目が残る。軟質で黄灰色を呈する。厚さ約2.8cm。平行叩き目平瓦(4)は平行線の間隔が広く一部に斜めの糸線がある。本例では正格子叩き目A種を併用している。凹・凸面とも一部を縦ナデ調整する。硬質で灰色を呈する。厚さ1.3~1.5cm。カキ目調整A種(6)は凹線の幅が5mm前後と広い。凹面は未調整。側面は分割裁線が残る。やや軟質で淡褐色を呈する。厚さ2.1~2.4cm。カキ目調整B種(5)は凹線の幅が2~3mmと狭い。側・端面及び凹面の線を寛削りする。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ約2.4cm。

敷面平瓦(7)は焼成前に魚を描く。凸面は横ナデ、凹面は未調整で布目と模骨痕が残る。硬質で青灰色を呈する。厚さ約2.0cm。白鳳時代に比定できる。(8)は焼成前に文字を書くが解読できない。やや軟質で暗灰褐色を呈するがつくりは(7)と似ており白鳳時代に比定できる。厚さ約2.4cm。

割裂斗瓦(9)は凸帯に荒い縄甲き目、凹面に荒い布目が残る。厚さ約12cm。平安時代。

鷗尾(10)は胴部から縦帯にかけての破片で、凸帯にコンパスによる円文をあらわす。やや軟質で暗灰褐色を呈する。厚さ3.0~3.5cm。他に硬質で青灰色を呈する鱗部の破片がある。表裏に段型を削り出す。厚さ3.3~3.5cm。ともに7世紀中頃に比定できる。

註1) 中村春寿・稲垣晋也「法起寺の発掘成果」(『奈良県観光』48 1960)、前掲実知雄「法起寺境内発掘調査概報」1977



第34図 平瓦・割斗瓦・鷗尾(1:4)

2. 土器類

昭和58年度の調査では、円明院跡の第265トレンチ、西方院跡の第266トレンチを中心に7世紀前半の飛鳥時代の土器が、また、西室・西院回廊間の第258・259トレンチを中心に奈良時代の土器が出土したが、これらは量的にはいずれもわずかである。出土土器類の主体を占めるのは、過去数年の調査の場合と同じく、遺物包含層及び塵芥処理のための土壌から多量に出土する中世～近世の土器・陶磁器類である。これら中近世の土器類の大半はなお整理途上であり、今回は比較的遺存状況の良い西室・西円堂間の第260トレンチと、宝珠院・西室間の第273トレンチの2ヵ所の土壌の出土土器、及び第260トレンチの瓦窯内に投棄された土器類の一部を報告するに留める。

A SK5128出土土器(第35図1・2)

土坑SK5128は第266トレンチ南半部で検出した不整形の土壌。埋土から7世紀前半の土師器杯CIと須恵器杯Hが出土。杯CI(2)は口径16.8cm、口縁部外面と内面上端部をヘラミガキし、放射状暗文をもつ。杯H(1)は径13.2cm、口径11.0cm、器高4.5cmで、ほぼ完形。底部外面は底面からみて右回りにロフロによらないヘラケズリで調整する。

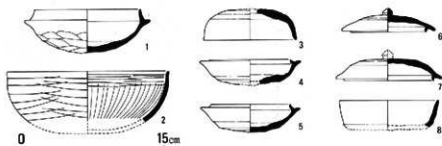
B SK5125出土土器(第35図4)

土坑SK5125は第266トレンチ北端部で検出した不整形の土坑。須恵器杯G蓋と杯Hが出土した。杯H(4)は径10.6cm、口径8.4cm。底部外面はヘラキリのままで不調整。

C SK5121出土土器(第35図3・7・8)

土坑SK5121は第265トレンチで検出した一辺約60cmの方形の小土壌。掘立柱建物SB5110の柱掘形に重複し、SB5110より古い。埋土から須恵器杯G・杯G蓋・杯H蓋が出土した。杯G(8)は口径10.2cm。底部外面はヘラキリまま。杯G蓋(7)は径10.9cm、口径9.2cm。頂部外面はヘラケズリで仕上げる。杯H蓋(3)は口径9.6cm。頂部外面はヘラキリままの不調整である。

建物SB5110の規模確認のためトレンチを南に拡張した際に、SB5110の柱掘形を覆う黄灰粘土包含層から小形の須恵器杯G蓋、もしくは直口蓋の蓋とみられるもの(6)が出土



第35図 SK5128・5125・5121等出土土器

した。径9.6cm、口径7.8cm。頂部外面をヘラケズリし、宝珠形のつまみをつける。

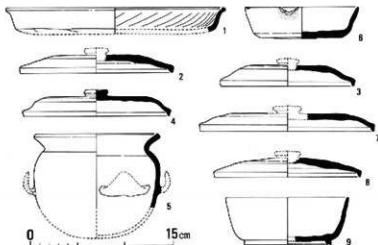
D 第258トレンチ整地層出土土器(第36図6~9・第38図5・6・9)

西室・西院回廊間の北寄り、東西方向に設定した第258トレンチのたち割調査の結果、谷状地形を埋めた数層からなる整地土層を検出した。下層の灰色炭混粘土層から須恵器杯A・杯B・杯B蓋を含む奈良時代前半の土器が、またその下の淡褐色パラス層の上面で、7世紀前半の須恵器杯Hが出土した。杯H(5)は径10.4cm、口径8.3cm、器高2.9cmで、ほぼ完形。底部外面はヘラキリままの不調整。灰色炭混粘土層出土の須恵器杯AⅣ(6)は口径11.8cm、器高3.3cm。底部外面はヘラキリまま。灯火器として使用されており、灯心を固定するため、口縁部の一部を幅1.8cmの半円状に打ち欠いている。杯BⅡ蓋(7)は口径18.2cm。頂部外面はヘラキリ後ロクロナデ。内面は硯として使用され磨耗が著しい。杯BⅢ蓋(8)は口径15.2cm。頂部外面はヘラケズリ後ロクロナデで仕上げる。杯BⅢ(9)は口径13.0cm、器高5.0cm。底部外面はヘラキリ後ナデで仕上げる。

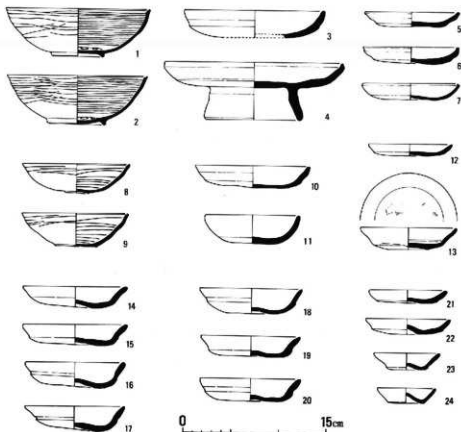
E SD5040出土土器(第36図1~3)

溝SD5040は第259トレンチ中央部で検出した幅約50cmの南北溝。埋土から土師器皿A、須恵器杯B蓋が出土した。皿A(1)は口径22.4cm。底部外面ヘラケズリで、内面に粗い放射状暗文をもつ。杯BⅢ蓋(2)は口径15.8cm。杯Ⅳ蓋(3)は口径13.8cm。頂部外面はいずれもヘラケズリ後ロクロナデで仕上げる。

同じ第259トレンチ西端の黒灰色土遺物包含層から、三彩盤の小破片が出土した(口絵写真)。高台部分と口縁部下端を含む破片で、高台の復原径27.0cm。口縁部と高台側面に輪花状の凹みをつくる。おそらく口縁部の平面形を八花形に形どった花盤とも呼ぶべき形態の盤であろう。三彩釉は内外両面に施釉されているが、内面は火を受け、釉が荒れている。胎土の特徴は従来知られている奈良三彩、唐三彩のいずれとも異なる。



第36図 SD5040・SK5066等出土土器



第37図 SK5046・5218・SY5050出土土器

F SK5066出土土器(第36図4・5)

土壙SK5066は第264トレンチ北端でその南端を検出した大形の土壙、奈良時代前半の土師器甕B、須恵器杯B蓋と佐波理匙が出土した。杯BⅢ蓋(4)は口径15.3cm、器高2.8cm。頂部外面はヘラケズリ後ロクロナデで仕上げ、扁平な宝珠形のつまみをつける。甕B(5)は口径12.8cmの小形品。火熱のためボロボロになっており、器面の調整は不明。

G SK5046出土土器(第37図1～7)

土壙SK5046は第260トレンチ西北部でその東半部を検出した円形の土壙。埋土から少量の瓦器椀・土師器皿が出土した。瓦器椀(1・2)は口径15.0cm、器高5.1～5.2cm。口縁部内外面をヘラミガキし、底部内面にラセン暗文をもつ。大皿(3)は口径14.6cm、器高2.9cm。大皿(4)は口径18.8cm、器高6.1cm。高さ3.5cmの大きな高台をもつ。小皿(5～7)は口径9.8cm、器高1.6～1.8cm。大皿(3)と小皿(5・6)は口縁部の2段ヨコナデに、また大皿(4)と小皿(7)は口縁端部のつまみ上げに共通する特徴をもつ。

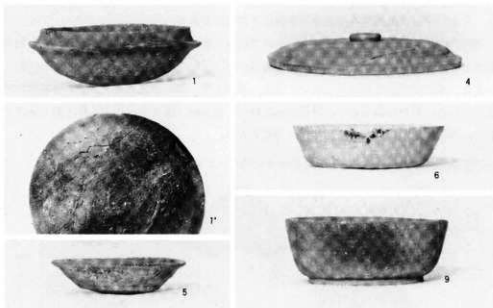
H SK5218出土土器(第37図8～13)

土壙SK5218は第273トレンチ中央部で検出した一辺約2mの方形の土壙。埋土から瓦器椀・土師器皿と青磁小皿が出土した。瓦器椀(8・9)は口径11.1cm、器高3.5～3.2cm。内

面を粗くラセン状にヘラミガキし、口縁部外面にもわずかに粗いヘラミガキが認められる。大皿(10)は口径11.8cm、器高2.4cm。口縁部は2段ヨコナデで調整する。小皿(12)は口径8.6cm、器高1.3cm。他に口径10.0cm、器高3.1cmのやや深い器形のもの(11)があり、茶褐色系の特徴ある胎土・色調をもつ。生産地の違いを示すものか。青磁小皿は口径10.0cm器高2.3cm。底部内面に浅い櫛目文をもつ。内面と口縁部外面に青みのかかった灰色の釉をかけ、ヘラケズリ調整の底部外面は露胎とする。

1 SY5050出土土器(第37図14~24)

第260トレンチの瓦窯SY5050の廃絶後、その焼成室内に投棄された一群の土器である。総数100個体を越えるとみられる大量の土師器皿からなるが、整理未了のためその一部を報告する。大皿(14~20)は口径10.2~10.8(平均10.5)cm、器高2.2~2.7(平均2.5)cm。口縁部は1段ヨコナデで、ヨコナデの下端が沈線状に凹むものがある。中皿(21~22)は口径8.0~8.8cm、器高1.4~1.7cm。小皿(23~24)は口径6.0~6.8cm、器高1.6~1.7cm。底部中央部が上方へ突出する形態。形態・法量から室町時代以降の土器と推定される。



第38図 SK5128(1), SK5066(4), 第258トレンチ整地層(5・6・9)出土土器(1:3)

3. 金属製品ほか

各所に設けたトレンチで出土した金属製品には次のようなものがあるが、それらには年代の決め手となる土器等とともに一括出土した好資料はない。

青銅製品 毛彫のある表裏渡金の環珞・銅環・大小の鈴各1・鏡鈕部・鍔・小円板・銅板・銅線など。

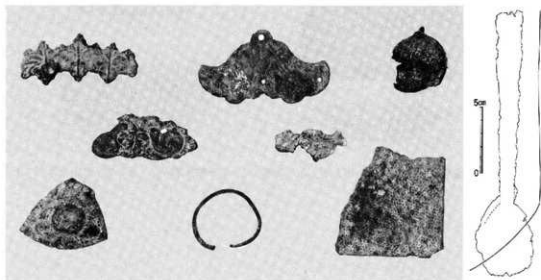
鉄製品 大小角釘・鋸・鏝・刀片・鉄板片。

他に円明院跡に設けた265トレンチのSX5066から、奈良時代の土器とともに佐波理匙が1点出土した。匙は土塊のままようやく取り上げることができ、樹脂である程度固めたのちさらに土を徐々に取り除き、X線透過写真を撮影した。匙はかなりこまかく破損しているため、上部を若干つけたままアクリル透明樹脂で硬化した。

この匙は現全長20cm余あり、匙面は木葉形になっており、柄の幅はきわめて広く、柄尻に近づくにつれその幅を増し約2cmとなる。柄と匙面のなす角度は約135度となり、図の断面形は復原的に描いたものである。このような匙には匙面が円形になるものとの2種があり、ともに法隆寺献納宝物や正倉院御物にその類例がある。

西院西回廊西側の267トレンチでは、ふいご羽目・鉦澤・スサ入り窯壁片がそれぞれ数点出土しているが、遺構年代ともに不明である。

また、本坊唐門脇に設けたトレンチでは、護摩を焚く際の石製火舎と思われる断片が出土している。石材は凝灰岩で、外径42cmの材に、径24cm、深さ9cm以上の焔を削り込んでおり、内面は黒く煤けている。年代は不明である。



第39図 各トレンチ出土青銅製品とSX5066出土佐波理匙

IV ま と め

1. 遺 構

昭和53年度から行われた法隆寺防災工事にともなう発掘調査は最終年度を迎えた。昭和58年度の発掘調査の成果と問題点をとりまとめておこう。

西院中心伽藍の東側、すなわち東面回廊の東側は西院造営以前には谷状の地形であったことが今までの発掘調査で確認され、西院造営の過程でこれが埋められたことが明らかになっている。今年度の調査は主として伽藍西半部で行われ、西面回廊の西側がもともと谷状の地形であることが再確認された。大講堂と地藏堂の間が深い谷となっていることは、昭和54年度の調査（79-3トレンチ）の際に判明したことであり、この時は地藏堂の東側で現地表下1.5mの深さまで掘り下げて旧地表面に至らなかった。今回の調査では第258・259・271の各トレンチで、西面回廊の西側が現地表下3mの深さをもつ谷状の地形であることが確認されたのである。弁天池は谷筋の南にあたり、おそらくこの谷を利用したものであろう。これは東面回廊東側谷筋に鏡池があることとよく似た状況といえよう。この谷を埋め立てる工事は、東西の谷にはさまれた丘陵を削って西院の中心伽藍造営地を造成した際に始められたものと考えられるが、完了したのは、出土した軒瓦の中に法隆寺式軒丸瓦（37C）や8世紀代の須恵器片が含まれる整地層も見られることから、西院中心伽藍造営の終了ちかくの頃と考えられる。

現在の西室は本来の位置にはなく、承暦年間（1077～1081）に当初の西室が焼失した後、今の位置に営まれたものである。創建当初の西室の位置を、昭和55年度の発掘調査（第3トレンチ）によって西面回廊の直ぐ西側で推定することができた。昭和58年度の第258・259トレンチで検出した南北溝SD5010とSD5030は第3トレンチで検出した旧西室の東雨落溝と考えたSD01の延長線上にある。それによって西室の原位置を再確認する形となった。しかし、さらに南に設定した第272トレンチでは南北溝の延長部を検出できなかったため、旧西室の南辺部を確認するに至らなかった。

西室の北に設定した第261トレンチで検出した瓦窯跡は、法隆寺として昭和57年度に東院で検出した瓦窯跡にひき続いて2番目のものとなった。同一構造で2基が相い接して築かれていた。いずれも西室北側に接しており、西室との同時存在は考えにくい面がある。またSY5050の焚口と焼成室は西室背後の崖面の整形によって破壊されており、崖面の整形は西室がここに建てられた時のことと考えられるので、今回検出した2基の窯が築かれたのはそれ以前ということになろう。西室が現在の位置に建てられたのは棟木銘から寛喜3年（1231）と考えられており、鎌倉時代の法隆寺瓦窯の存在を明らかにしたその意義はきわめて大きい。13世紀前半、法隆寺では東西両院ともに修造工事が盛んに行われている。今

同検出した瓦窯はそうした一連の工事の際に操業していた瓦窯と考えられる。西室が現在の地に宮まれるようになってからは、この瓦窯の操業は不可能と思われるので、その後の修復工事に用いた瓦窯は境内の他の場所に築かれたのだろう。法隆寺瓦窯は発掘調査によって、鎌倉時代のもののみが東西両院で明らかになったことになる。この前後の時代の瓦窯については全く知られていない。造瓦工房を含めて今後の大きな課題である。

第269トレンチで検出したSX5170は、その存在が予想されたものだったとは言え、法隆寺における伝承の確かさを証明するものであった。SX5170は大湯屋前の参道で検出された大石であり、その位置から『古今一陽集』に「伏蔵^{フツカウ}」と記すものに相当することが明らかである。ここに記す三伏蔵とは他に金堂東北隅と大経蔵にあるものを指している。伏蔵がどのような性格をもつものであるのか、それは今後の課題であるが、鎌倉時代に心伽藍の造営工事の期間を通じて行われたことがわかる。と同時に、軒平瓦116Cが西構である。『古今目録抄』には金堂東北隅、廊の西南角、経蔵の下に伏蔵があると記されている。『古今一陽集』の記載と異なるのは「廊の西南角」である。『一陽集』ではこれが、「浴室の前」となっている。今回の調査によって、はからずもこれに相当する遺構が検出されたのである。

西円堂東側における避雷針工事にともなう立会調査では、現地表下約2.5mから瓦器片が出土した。この位置は西円堂基壇東縁にほぼ接する位置である。このことは、少なくとも中世あるいはそれに近い頃に、西円堂東側が、何らかの事由によって崩壊し、それを修築したことを示している。この崩壊はきわめて大規模なものであり、大雨による土砂崩れがあったのであろうか。

2. 遺 物

出土遺物は、そのほとんどが瓦類と土器類である。瓦類で注目されるのは、西面回廊西側の谷筋を埋めた整地土から出土した資料である。この整地は西院造営にともなう行われたものと考えられるのであるが、軒平瓦116Cが多量に含まれているところから、西院中心伽藍の造営工事の期間を通じて行われたことがわかる。と同時に、軒平瓦116Cが西院創建時に用いられた軒平瓦116Aと、さほど大きな年代差をもたないものであることが明らかとなった。年代を決めにくい中世の瓦の中で、今回SY5050・5060から出土した軒平瓦143Dは西室造営年代との関連から寛喜3年(1231)以前のものであることが明らかになり、軒瓦編年上の基準資料となった。

土器類で特殊なものは第259トレンチから出土した三彩盤である。胎土の蛍光分析の結果、今までに行なった奈良三彩の分析値とは一致しないことがわかった。とは言え、大安寺出土唐三彩の分析値とも異なるので連断は避けねばならないが、分析量の比較からすれば今回出土した三彩盤が渡来品である可能性が強い。

第二部 法隆寺収納庫建設に伴う発掘調査

I 序 章

法隆寺には、資料価値のきわめて高い各種の文化財が保存されている。それらの文化財は宝蔵殿や収蔵庫、あるいは古い土蔵などに取められている。また、解体修理に伴って保存された建築部材は収蔵庫及び古材庫に取められている。

近年法隆寺内の什宝類の調査を徹底的に行う「法隆寺昭和資財帳」編纂事業が進められており、この調査で新たに発見された資料も次第に増えている。また、当寺に伝えられている4万数千基にのぼる百万塔などは、昭和10年代に箱詰めされて倉庫に納められていたのであるが、整理・調査を進めていくにしたがって、収納方法に万全を期さねばならないことが痛感されるようになった。その他、瓦や土器などの考古資料も発掘調査の結果、膨大な量となっている。

このような状況から付宝類の収納施設が必要とされ、その予定地として律学院の北側の地が選ばれたのである。

律学院の北側は史跡法隆寺旧境内に含まれており、事前の発掘調査を必要とするところでもある。また、昭和56年度の防災工事に伴う発掘調査によって飛鳥時代の溝をはじめ、多くの遺構の存在が確認されている。そのため、発掘調査は収納庫を建てる範囲だけに限らず、周辺部をも含めた範囲を対象として調査を行なった。

発掘調査は昭和58年10月26日から同年12月20日までで、630㎡の範囲で進められ、古墳時代以降の遺構を検出することができた。調査は法隆寺の依頼によって、奈良国立文化財研究所と奈良県立橿原考古学研究所とが共同で行なった。



第40図 発掘調査風景

Ⅱ 検出遺構の報告

検出した遺構は古墳時代の流路、飛鳥時代の流路、近世の溝・井戸・土坑などであり、確実に中世に属する遺構は検出できなかった。次に、時期別に主な遺構について述べたい。

1. 古墳時代の遺構

トレンチの東北隅で古墳時代の上器を含む流路(SD6212)を検出し、トレンチの東南隅でも斜行する流路を検出した。蛇行しながら南流する自然の流路の一部と考えられ、その下層には砂、礫などの河川状の堆積が見られる。後述する飛鳥時代の流路(SD6191・6180)はこの自然の流路を整備したものであろう。

SD6212 トレンチの北東隅で検出した遺構で、蛇行しながら南流する流路である。トレンチ北壁の上層断面では、流路の幅は3.3mあり、ほぼ飛鳥時代の流路(SD6191)の幅と等しい。流路の中央部は断面形がレンズ状に深み(幅約80cm)黒灰色粘土が堆積している。これが流路の底であり、ゆるやかに屈曲してトレンチの東辺にかかる。古墳時代の須恵器、や土師器が出土した。

SD6214 やトレンチの南東隅で斜行する自然の流路で幅約4m、深さ約40cm以上。古墳時代の須恵器ノ土師器が出土した。

2. 飛鳥時代の遺構

トレンチの東辺と南辺で飛鳥時代の流路(SD6191・SD6160)を検出した。近世の遺構により分断されているが、元来は一連のものと考えられ、SD6160とSD6191から出土した遺物の中には接合できるものがある。

SD6191 トレンチ東辺で検出した幅約3.5m、深さ60cmの流路で、北から南へ流れる。上流はトレンチ外に続いている。南側は近世の遺構で切られている。飛鳥時代の土器、瓦等の遺物が出土した。

SD6160 トレンチの南辺で検出した流路で幅約2m、深さ約50cm、東北から西南に流れる。昭和56年度第107トレンチでこの流路の一部を検出した。溝内には3段階の堆積がみられ、溝は次第に浅く、幅広くなり、奈良時代までには完全に埋没する。溝内からは飛鳥時代の瓦・土器が出土した。

SK6171 トレンチの中央部東寄りで検出した土坑で、東西4.3mの楕円形。飛鳥時代の土器・瓦等が出土した。トレンチの北西部の拡張区で検出したSK6137は古代のものと考えられる。



第41圖 調査地全景(上層)



第42圖 調査地全景(下層)



第43図 SD6212(北から)



第44図 SD6160(西から)

3. 近世の遺構

溝・土坑・井戸・埋嚢等の遺構を多量に検出した。主な遺構について述べよう。

SX6113・6232・6234 溝状遺構(SD6124)が埋った後その北側に作られた東西方向の石列である。元来は一連の遺構でSX6234・SX6113間にも点々と石列が残り、さらに西側につづく。SX6232では、この石列の南辺に瓦質の土管を並べた排水のための施設が設けられている。昭和57年度第102トレンチで検出したSA1004も同一の遺構と考えられる。土堀の基礎の南側の石積と考えられるが、北側は不明確で幅は明らかでない(SA1004は幅0.7m)。寛政9年の「法隆寺惣境内之図」にみえる発志院と福生院との境界築地の可能性が高い。昭和57年度第102トレンチで検出した土堀(SA1009)の跡は呼としてその痕跡を残すが、今回の調査でも、呼のほぼ下で東西に築地崩壊土と考えられる黄褐粘質土を検出した。SD6124 幅2～3m、深さ80cmの溝である。トレンチを東西に横断し、発掘区の東辺部で南に折れ曲がる。西方では幅を広げSD6233に連なるものと考えられる。

SD6130 トレンチ中央東辺部で検出した溝である。元来は東から西へ流れ、南へ折れまがりSD6124に注いでいたものと考えられる。しかし、この溝は後にSD6124北肩に設けられたしがらみ(SX6136)で塞ぎ止められている。幅約3m、深さ70cm。



第45図 SX6113(東から)



第46図 SD6124(西から)

SD6236 SD6130・SD6124の下層で検出した南北方向の溝状遺構で幅1.8m、深さ約1m。SD6124の南北溝部分の下層にあり南へ延びる。最初に南北溝SD6236が掘られ、次にSD6130・SD6124が掘られ、最後にはSD6130が塞ぎ止められ謎形の溝SD6124だけが機能していたものと考えられる。

SX6136 SD6130を塞ぎ止めるしがらみである。径約10cmの丸太を2本並行にならべ、その間と両外側に杭を打ち、小枝・竹をからませる。長さ約2.7m、幅約50cm、高さ約60cm。

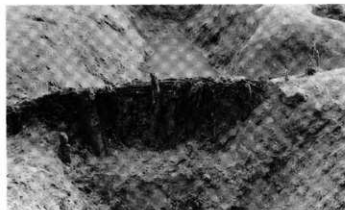
SX6215 トレンチの西側の拡張形で検出した柱列遺構で橋脚と考えられる。溝SD6233にかかるものであるがSD6233の南側岸は検出していない。柱穴は6箇所、杭は4本検出した。両側の4本が四角にならび、北側の2本の柱にはそれぞれ北側に2本ずつ杭が伴う。

SX6001・6002・6005・6008・6009・6078・6095・6112・6136・6144・6216・6219 近世の壘や鉢などを埋めた所謂埋喪である。12個検出したが多くは底部だけしか残らない。

SE6039 トレンチ北端で検出した井戸である。



第47図 SX6078埋置状況



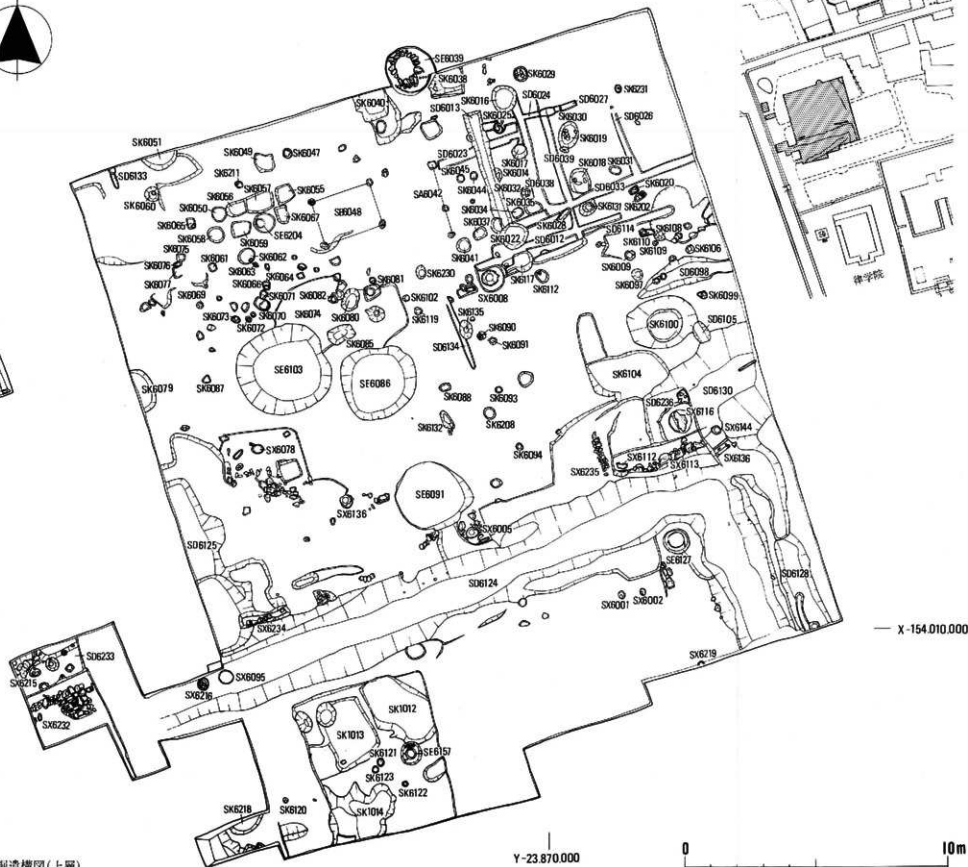
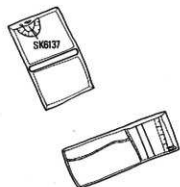
第48図 SX6136(北から)

木製の蓋をかぶせ埋めていた。玉石を積みあげた円形の井戸で直径60cm、深さ3.8m。掘方に沿って平瓦を縦に並べていた。SE6103・6086・6091

いずれもトレンチの中央部で検出した素掘りの井戸である。SE6086の上幅は南北に2.7m、東西2.9mで深さは検出面から4.6m底はほぼ円形で直径は1.5mである。井戸底の埋土から近世の土器が出上した。SE6103・6091は底まで掘り下げていないが出土遺物からみていずれも近世のものである。

SE6127 トレンチの南東部で検出した井戸状の遺構である。

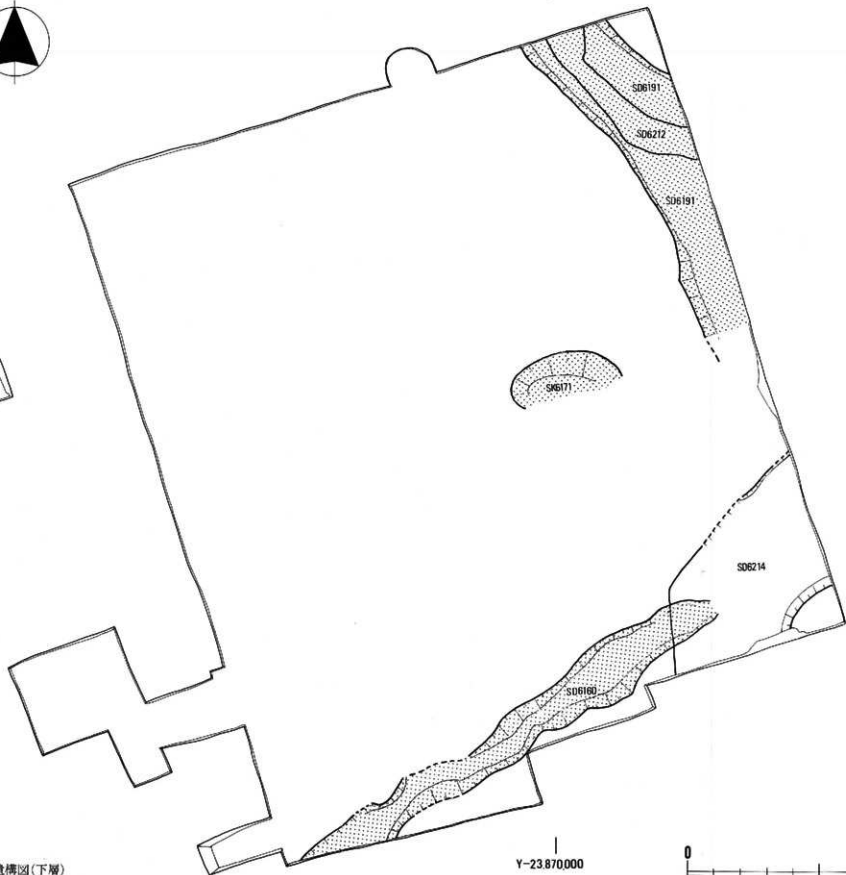
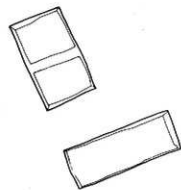
掘方は径1mの円形で、



第49図 収納庫建設予定地発掘遺構図(上層)

Y-23,870,000





X-154 010 000

Y-23 870 000



第50図 収納庫建設予定地発掘遺構図(下層)

深さは検出面より80cm。掘方の底より径約60cmに竹を編んだタガが出土した。近世のものと考えられる。

SE6157 トレンチの南西部で検出した井戸状の遺構である。径80cmの掘方の中に径約40cmの曲物を用いた井筒を据える。

SE6204 トレンチの北西部で検出した井戸状の遺構で径80cmの掘方の北西部に径約40cm（高さは30cmまで残る。）の曲物の井筒を据える。検出面からの深さ64cm。

SX6116 SD6130の埋土に作られた遺構で、大型の種の底板と考えられる直径90cmの板とその掘方を検出した。

SD6048 トレンチの北部で検出した掘立柱建物で1×1間。柱間は東西2.3m、南北1.7m、柱径は約10cm。

SA6042 SB6048の東側で検出した南北方向の柱列で2間分を検出した。

SX6235 SD6130の西側で検出した南北方向の石列である。東に接して検出したSX6113の下層にあたる。

SD6012・6013・6023・6024・6027・6114・6033

トレンチの北東部で検出した溝状の遺構である。遺構として最も新しいもので近代の深耕に伴うものと考えられる。

その他 この調査では先に述べた遺構以外に多量の土坑を検出した。トレンチ北東部で検出したS-K6019・6018・6029には土坑内に根石状に石が敷かれていて、礎石掘方の可能性もあるが建物にはまともでない。他の土坑については、大半は近世のものと考えられるが遺物の出土しないものが多く、中世・古代のものも含む可能性がある。



第51図 SE6127



第52図 SE6157

Ⅲ 出土遺物の報告

1. 瓦 類

本調査においては軒丸瓦87点、軒平瓦165点、鷗尾1点、鬼瓦5点、鳥衾1点、鬘斗瓦1点、面戸瓦2点のほか、多量の丸・平瓦が出土した。時代は飛鳥時代から近世に及ぶ。ここでは飛鳥時代の溝SD6160・6191から出土した瓦類や今回はじめて出土した新型式の軒瓦などについて記述する。なお、軒瓦の内訳については巻末に一覧表を付した。

A SD6160・6191出土瓦類(第54図)

軒丸瓦2点、鷗尾1点のほかに整理平箱で約10箱分の丸・平瓦が出土している。

軒丸瓦3B(1)はいわゆる角端点珠形式の単弁9弁蓮華文軒丸瓦である。中房は突出し、蓮子1+6を配する。瓦当表面は中高で、回転利用のナデを施す。丸瓦の接合位置は高く、接合粘土は内外とも少ない。硬質で灰色ないし青灰色を呈する。SD6160・6191から各1点出土。軒丸瓦3にはB・C種があり、弁の形状や蓮子の配置がわずかに異なる。昭和44年度の若草伽藍の調査では手彫り杏葉唐草文軒平瓦と組み合わせることがわかっている¹⁾、今回の調査では出土していない。

鷗尾(2)は頂部に近い左側胴部の大きな破片である。胴部と緒部に正段型を削り出し、胴部と緒部の境及び背稜近くに断面台形の凸帯を削り出す。内面は緒部まで全体をナデツケている。昨年度出土した飛鳥時代の鷗尾と同様に腹部は緒部のかなり後方に取り付くと考えられる。また、背稜部は昭和14年の若草伽藍の調査で出土した鷗尾(第53図)のように背稜とその左右の凸帯計3条で構成されていたと考えられる。比較的硬質で灰色を呈する。厚さ1.4~2.0cmと薄手である。SD6191出土。

玉縁丸瓦(3)は数点出土している。飛鳥時代に特有な丸瓦で、凹面の布目は丸瓦本体にのみ認められ、玉縁部は丸瓦本体に別粘土を接合したのち、凹・凸面ともナデ調整する。

軟質で灰褐色ないし黒褐色を呈する。(3)は凹面に幅1.5~2.0cmの横骨痕と布目が残る丸瓦片である。行基丸瓦であろう。凸面は縦及び横方向にナデ調整し、側面と凹面の側縁を寛削りする。焼成前に釘孔を穿っている。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ1.8cm前後、後原径約17.5cm。

平瓦はいずれも桶巻き作りである。3種に大別できる。凸面を丁寧に縦ナデ調整するものである。凹面は一部に縦ナデを加えるが、側面は未調整で分割破面が残る。硬質で暗青灰色を呈するものと、やや軟質で淡灰褐色を呈するものがある。厚さ1.3~1.7cm。(5)は正格子叩き



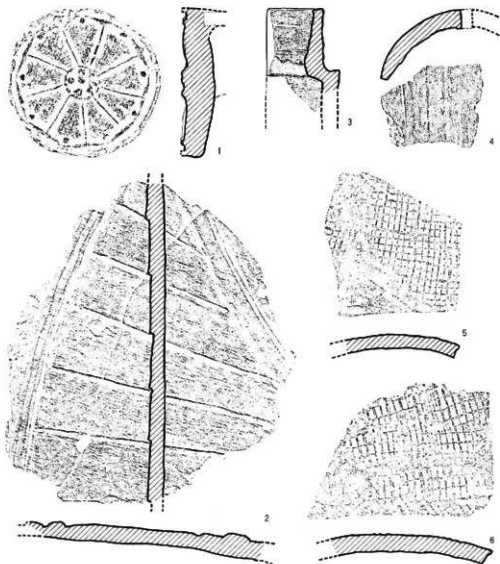
第53図 若草伽藍出土鷗尾

目平瓦である。格子は1辺が4～6mmの方形である(A種)。凹・凸面とも一部にナデを加える。側面は未調整で分割破面が残り、端面の凹面側は浅く面取りする。硬質で暗青灰色ないし暗灰褐色を呈する。厚さ1.2～1.8cm。(6)も正格子叩き目平瓦である。格子は5×10mmほどの長方形であるが、本報告の第一部でとりあげた正格子叩き目B種よりやや大きく(C種)。凹・凸面とも未調整。側面も未調整で分割破面を残すが、端面の凹面側は幅広く横に磨削りする。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ約1.8cm。

註

1) 文化庁文化財保護部記念物課「法隆寺若草伽藍跡昭和44年度発掘調査概報」1969

2) 石田茂作「総説飛鳥時代寺院址の研究」1944



第54図 SD6160・6191出土瓦類(1:4)

B 新形式の軒瓦(第55図)

(1) は外区に珠文と線鋸齒文をめぐらせた複弁8弁蓮華文軒丸瓦54の新種でC種とした。A種は蓮子が1+4+8, B種は蓮子が1+4。C種は蓮子が1+8だが, B種より珠文が粗。奈良時代に比定できる。

(2) は外区に疎な珠文をめぐらせた3回反転の均正唐草文軒平瓦147Aである。従来, 中心飾が不明であったが, 本資料でそれが明らかになった。額は直線に近い曲線額である。平安時代に比定できる。

(3) は本報の第一部で新形式としてとりあげた軒平瓦と同種の圧端部破片。唐草第4単位の中に隘区界線があり, 范の切り縮めと考える。曲線額。平安時代に比定できる。



第55図 新形式の軒瓦(1:4)

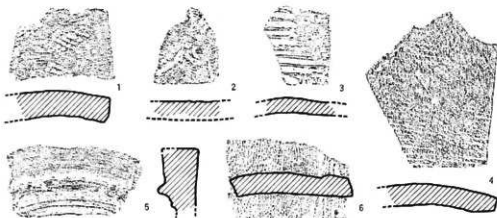
C その他(第56図)

飛鳥時代の平瓦4種と, 契斗瓦及び特殊な瓦製品について紹介しておこう。

斜格子叩き目平瓦(1)は, 格子が4×5mm前後(A種)。凸面は一部横ナデ, 凹面は未調整。側面は荒削りする。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ約2.6cm。凹面に青海波文のある平瓦(2)は硬質で, 凸面は剝離している。灰白色を呈する。凸面にカキ目のある平瓦のうち(3)は凹線の幅が5mm前後と広いA種。硬質で灰白色を呈する。厚さ約1.5cm。(4)は凹線の幅が2~3mmと狭いB種。カキ目は横及び斜め方向に施すが, わずかに斜格子叩き目が残る。側面と凹面の縁は荒削り。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ約2.6cm。

特殊瓦製品(5)は一面に弧状の凸帯を設ける。重弧文鬼瓦かとも推測されるが明らかでない。やや軟質で灰白色を呈する。厚さ2.1~3.7cm。

割契斗瓦(6)は凸面に縄叩き目, 凹面に荒い布目が残る。幅約12.5cm。平安時代か。



第56図 平瓦・契斗瓦・特殊瓦製品(1:4)

2. 土器類

取納庫建設予定地の調査で出土した土器類は、調査区の南端と東端で検出した複数の自然流路SD6160・SD6191・SD6212・SD6214から出土した6世紀中頃～7世紀前半の土器、及びこれらの流路のベースとなる茶褐色粘土層出土の古墳時代土器と、調査区の南半で検出した2条の溝SD6124・6130から出土した中世～近世の土器・陶磁器類に分けられる。中～近世の土器・陶磁器類はこの2条の溝の他に、調査区各所で検出した土坑・溝から多量に出土しているが、整理未了であり、今回の報告では省略することにする。

A SD6160出土土器(第57図)

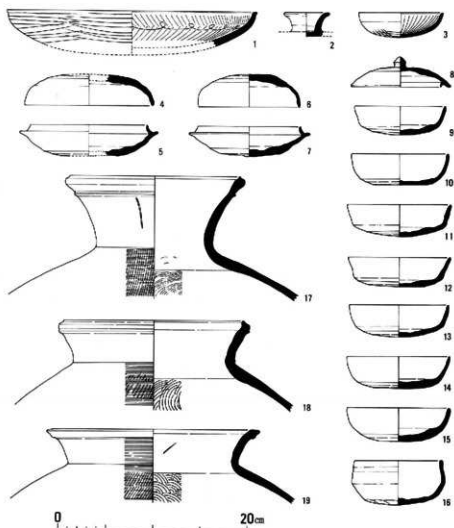
灰褐色からなる流路SD6160の埋土からは多量の上師器・須恵器が出土した。時期的には7世紀前半のものが主体であり、一部6世紀末頃に遡るものを含んでいる。水流のためか、土器器はほとんどが小破片で接合するものも少ない。一方、須恵器は土師器に比べてその量も多く、杯類には完形に近い個体多数を含んでいる。

土師器には杯C、皿A、盤、蓋、甕類の破片がある。杯CⅢ(3)は口径8.8cm、器高2.7cm。底部外面をヘラミガキし、方射状暗文をもつ。盤(1)は口径26.4cm。底部外面ヘラケズリの後ヘラミガキで、内面には2段の方射状暗文とラセン暗文をもつ。環状のつまみをもつ蓋(2)はつまみのみの破片。上端の径4.8cm、高さ2.1cm。おそらく台付碗の蓋であろう。大阪府玉手山横穴の出土品に類似品がある。

須恵器には杯G・杯H・碗・鉢A・平瓶・甕がある。杯H(5)は径14.6cm、口径12.2cm。杯H蓋(4)は口径13.3cm。底部外面、頂部外面はいずれもヘラケズリで仕上げ。杯H(7)は径12.8cm、口径10.8cmで、底部外面ヘラキリのまま。杯H蓋(6)は口径10.6cm。頂部外面ヘラケズリ。杯G(9)は口径9.4cm、器高3.0cm。底部外面ヘラケズリ。杯G蓋(8)は径10.6cm、口径8.4cm、器高3.3cm。頂部外面をヘラケズリして、宝珠形のつまみをつける。杯G(10～15)は杯G(9)に比べ一回り大きく、口径10.2～10.8cm(平均10.5)cm、器高3.1～3.5(平均3.3)cmの良くそろった法量をもつ。底部外面はいずれもヘラケズリ仕上げで、13・14の底部外面にはヘラ記号がある(第64図)。大阪府陶色古空跡群の製品をはじめとして、これまでに知られている7世紀前半の杯G・杯Hは、宝珠形のつまみを持つ杯G蓋を例外として、いずれも底部外面あるいは頂部外面のヘラケズリを省略するのが一般である。SD160出土の杯G(9～15)、あるいは杯H蓋(6)にみられるヘラケズリ仕上げの残存は、これらの製品を生産した在地窯が法隆寺近傍にあることを示すものかもしれない。碗(16)は口径9.2cm、器高4.7cm。底部外面は一方にヘラケズリした後、右回りの周縁ケズリで調整する。甕(17～19)はそれぞれ口径17.8、19.0、20.6cm。口縁部の形態を異にするが、体部はいずれも叩き成形の後、カキ目で調整する。17の頸部外面、19の内面にヘラ記号がある。

B SD6191出土土器(第58・59図)

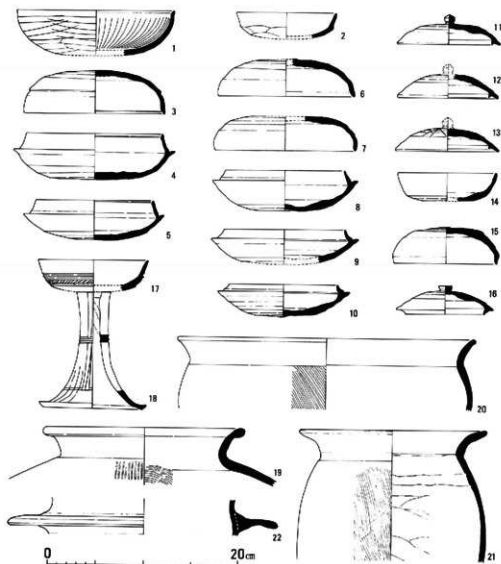
SD6191は調査区東端を南流する自然流路。埋土の堆積は上層から順に灰褐色砂(一部暗黄灰色粗砂)層、茶灰色バランス層、淡青灰色砂質土層であり、その下は流路のベースの茶褐色粘土層になる。2・5・6・13・15・16・18・20が上層の灰褐色砂・暗黄灰色粗砂層、1・3・4・10~12・14・17・19が中層の茶灰色バランス層、7・8・21・22が下層の淡青灰色砂質土層の出土である。上層・中層とも6世紀中頃~7世紀前半の土師器・須恵器が、混在して出土している。上層の灰褐色砂層から、SD160出土の須恵器甕(19)に直接接合する口縁部破片が出土しており、この2条の流路の埋没が同時期もしくははかなり接近した時期であったことが推測できる。また同じ上層の灰褐色砂層から、昭和57年度の第213トレンチの瓦敷き面SX4560で出土した獣脚門硯と同一個体とみられる硯の破片が出土



第57図 SD6160出土土器

した。SX4560はSD6191の南西100mに位置し、若草伽藍推定域の東端にあたる場所である。SD6191,他の流路に投棄された土器・瓦類の出所について、一つの手がかりを与えるものであろう。

土師器には杯C・杯H・皿A・甕・羽釜がある。杯CI(1)は口径16.2cm。口縁部外面へラケズリで、口縁部外面とヘラミガキし、内面に方射状暗文をもつ。杯H(2)は口径10.3cm。底部外面を不定方向のヘラケズリで仕上げ、底部と口縁部の間に稜をもつ。甕(20)は口径31.0cm。体部外面ハケ目調整で、口縁部内外面をヨコナデシ、端部は丸くおさめる。甕(21)は口径19.7cm。体部外面ハケ目調整、体部内面の中位以下をヘラケズリし、口縁部



第58図 SD6191出土土器



第59図 SX4560・SD6191出土土器脚円硯(1:3)

内外面をヨコナデして、端部を丸くおさめる。体部内面上端には成形時の粘土紐のツギ目を残す。羽釜(22)は口縁部・体部を欠く破片、黒色の雲母を多量に含む「生駒西製の土器」である。

須恵器には杯G・杯H・蓋・高杯・甕がある。杯H(4)は径16.8cm, 口径14.1cm, 器高4.9cm。杯H(5)は径14.5cm, 口径12.1cm, 器高4.3cm。いずれも底部外面をヘラケズリし、内面中央に同心円文をもつ。杯H蓋(3)は口径14.6cm, 器高4.5cm。頂部外面をヘラケズリし、内面に同心円文をもつ。杯H(8)は径15.2cm, 口径12.4cm, 器高4.1cm。杯H(9)は径15.4cm, 口径12.6cm。杯H(10)は径13.8cm, 口径11.2cm, 器高3.4cm。いずれも底部外面はヘラケズリ仕上げ。杯H蓋(6・7)は口径14.2cm, 器高3.9cmと口径14.6cm, 器高3.6cm。頂部外面をヘラケズリし、口縁端部は丸くおさめる。杯G(14)は口径10.2cm, 器高3.0cmで、底部外面はヘラケズリ仕上げ。杯G蓋(11)は径10.8cm, 口径9.0cm, 器高3.2cm。頂部外面をヘラケズリし、宝珠形をつまみをつける。杯G蓋(12・13)は径10.6cmと10.8cm。頂部外面ヘラケズリ。11・13の頂部外面にはヘラ記号がある(第65図)。杯H蓋(15)は口径10.6cm, 器高3.9cm。頂部外面はヘラキリままの不調整。蓋(16)は径10.2cm, 口径8.2cm, 器高3.0cm。頂部外面ヘラケズリし、頂部の扁平なつまみをつける。直口壺の蓋か。高杯(17・18)は別個体。杯部(17)は口径11.3cm。口縁部下半のつまみ出し凸帯と段の間に柳描き波状文をめぐらす。脚部(18)はいわゆる長脚2段3方透し形態。脚部部の径11.1cm, 脚高12.2cm。脚部外面にヘラ記号がある。甕(19)は口径20.2cm。体部叩き成形で、口縁部内外面をヨコナデし、端部は玉縁状に丸くおさめる。

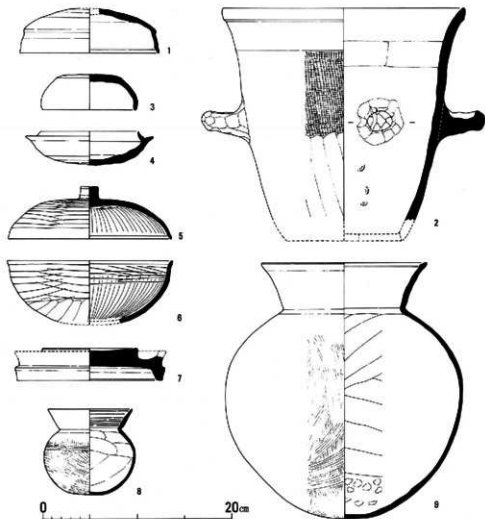
C SD6212出土土器(第60図1・2)

流路SD6212は調査区の東北端、SD6191に重複する位置にあり、その下層を東南に流れる自然流路。埋土の灰褐色パラス層から、6世紀中頃の土師器・須恵器が少量出土した。須恵器杯H蓋(1)は口径14.6cm, 器高4.6cm。頂部外面ヘラケズリで、口縁端部内面に凹線を入れ、端部に内方へ傾斜する面をもつ。頂部と口縁部の間の屈曲部は、SD6191出土の杯H蓋(3)にみられるシャープなつまみ出し突帯ではなく、ヨコナデによる鈍い段に成形しており、頂部内面の同心円文もみられない。甕(2)は口径25.4cm。体部叩き成形で、

体部外面下半を縦位のヘラケズリで調整し、口縁部内外面をヨコナデして仕上げる。内面は成形時の当板痕（同心円文）をナデで消し、口縁部に接する部分を横位のヘラケズリで調整し、平滑な器面に仕上げている。把手は棒状の粘土を貼り付けて成形したもので、上面にヘラの切込みをもつ。

D SD6214出土土器(第60図3・4)

流路SD6214は調査区の東南隅、溝SD6124、及びSD6160の下層を東北—西南の方向に流れる自然流路。黒灰色砂質土、暗青灰色粘土の埋土から、土器師・須恵器が少量出土した。須恵器杯H(4)は径13.4cm、口径10.3cm、器高3.6cm。底部外面ヘラケズリ仕上げ。蓋(3)は口径9.7cm、器高3.7cm。頂部外面ヘラケズリ仕上げ。短頸蓋の蓋か。



第60図 SD6212・6214等出土土器

E 包含層出土土器(第60図5~9)

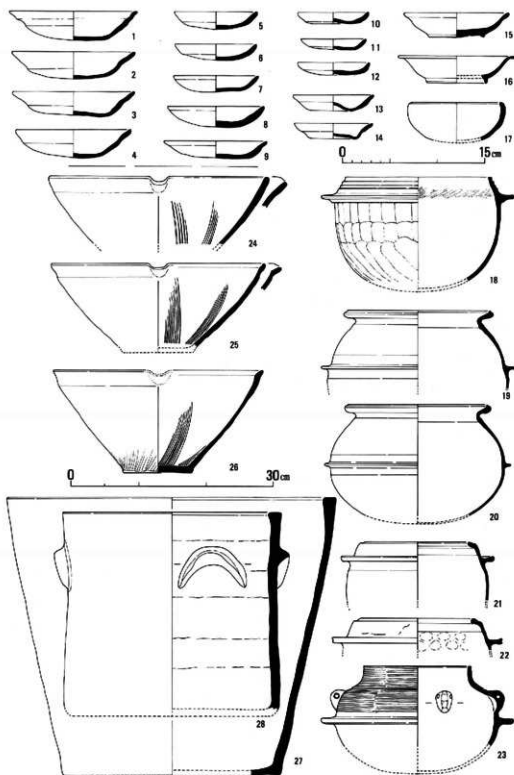
土師器蓋(5)、杯C(6)、須恵器円硯(7)は調査区の表土層及び暗茶褐色砂質土層の出土品。蓋(5)は口径17.2cm、器高5.5cm。土師器杯Cを逆転し、頂部に径2.0cm、高さ1.4cmの円筒形のつまみをつけた形態である。頂部外面をヘラミガキし、内面にラセン暗文と方射状暗文をもつ。SD6160出土の蓋(2)と同じく、おそらく台付碗の蓋になるものであろう。杯CI(6)は口径17.2cm、底部外面一方のヘラケズリで、口縁部内外面をヘラミガキし、内面に方射状暗文をもつ。円硯(7)は脚部の径15.8cm、膝部の径10.0cm、器高3.4cm。外堤上端を欠く。下面は膝部下面から脚部までロクロによらないヘラケズリで調整し、平滑に仕上げる。

土師器小形丸底壺(8)と大形の甌(9)はSD6160・6191、他の流路のベースとなっている茶褐色粘土層の出土品。壺(8)は口径8.8cm、器高9.0cm。体部外面ハチ目調整、内面ヘラケズリ調整で、口縁部内外面をヨコナデし、内面を横方向にヘラミガキする。甌(9)は口径17.4cm、体部径25.0cm、器高27.0cm。体部外面ハケ目調整、内面ヘラケズリ調整で口縁部内外面とヨコナデして仕上げる。口縁部はわずかに内方へ肥厚し、端面は内方へ傾斜する。底部内面には成形時の指頭圧痕を残す。8・9ともに古墳時代前半の布留土器の系統に連なるものであり、その新しい段階に属するものであろう。

F SD6130出土土器(第61図1~27)

溝SD6130は調査区の東南部で検出した溝。元来は東から西へ流れ、西端で南へ折れて溝SD6124の南北溝に注いでいた溝であるが、後にSD6124の直前でしがらみSX6136によって塞止められている。黒灰色粘質土の埋土から、多量の土師器・瓦質土器と陶磁器類の破片が出土した。

土師器には皿・碗・羽釜がある。大皿(1~4)は口径12.3~13.6(平均13.0)cm、器高2.7~3.1(平均2.9)cm。口縁部のヨコナデ調整は口縁部外面下端に及ぶ。1のみ2段ヨコナデ調整。1~4は灯火器として使用されている。中皿(5~6)は口径8.6cm、器高1.7~1.9cm。ヨコナデは口縁部外面下端に及ぶ。中皿(7~9)は口径9.0~11.0cm、器高1.8~2.2cm。ヨコナデ調整の範囲は口縁部外面上端までに限られる。中皿(5~6)との時期差、あるいは生産地の違いを示すものか。小皿(10~12)は口径6.9~7.6(平均7.4)cm、器高1.2~1.3(平均1.2)cm。ヨコナデは口縁部外面下端まで。中皿(13~14)は底部中央が上方へ突出する形態。口径8.2~8.6cm、器高1.6~1.8cm。口縁部のヨコナデ調整は口縁部外面中位まで。碗(17)は口径9.2cm。砂粒・雲母を含む粗い胎土の土器で、全面ナデ調整。他にほぼ同形態で、口径13.6cmの大形品がある。羽釜(19・20)は口径21.2cmと20.8cm。菅原正明の分類による「大和B₁型」にあたる。器面は灰褐色で、器壁断面中央部は暗灰色~黒色を呈する。羽釜(21)は口径15.4cm。菅原の「大和H₂型」。羽釜(22)は口径16.4cm。「大和H₂型」にあたる。体部内面に成形時の円形当板痕を残す。型式別の上個



第61圖 SD6130(1~27)・SX6078(28)出土土器

個体数は大和B型20個体以上、大和H型2個体が確認できる。

註1) 菅原正明「畿内における土器の製作と流通」(『文化財論叢』1983、同朋社)

瓦質土器には羽釜・茶釜・すり鉢・火鉢の他、用途不明の大型の深鉢の類がある。羽釜(18)は口径21.8cm。菅原の「河内D₂型」にあたる。胎土は茶褐色～暗褐色で、砂粒を含む。体部外面を横方向のヘラケズリで調整し、内面はナデ調整で仕上げるが、鈔の内側部分のみハケ目調整残が残る。幅広の鈔から内傾して立ちあがる口縁部は、外面に3条の凹線をめぐらし、端部はヨコナデで水平に面取りしておさめる。茶釜(23)は口径16.0cm、鈔の径28.8cm。体部上下に、水平の円孔をあけた半球状の環付をつけ、頸部に凹線1条をめぐらせる。体部上半から頸部・口縁部の外面は丁寧なヘラミガキを施し、鉄製茶釜の写しにふさわしい光沢をもっている。すり鉢(24～26)は口径31.2～32.4cm、器高15.3cm。底部外面不調整で、口縁部内面と外面上端をヨコナデ調整し、底部から口縁部に向けて、5～9本の摺目7単位前後からなる摺目をつける。すり鉢の破片はかなり多量にあり、図示した3例を含め14個体以上が確認できる。深鉢(27)は口径52.0cm、器高45.3cm、底径35.0cmのパケツ形の大型品。底部外面は砂底で、体部内外面はナデ調整。口縁部は水平に面取りし、ヨコナデ調整で仕上げる。

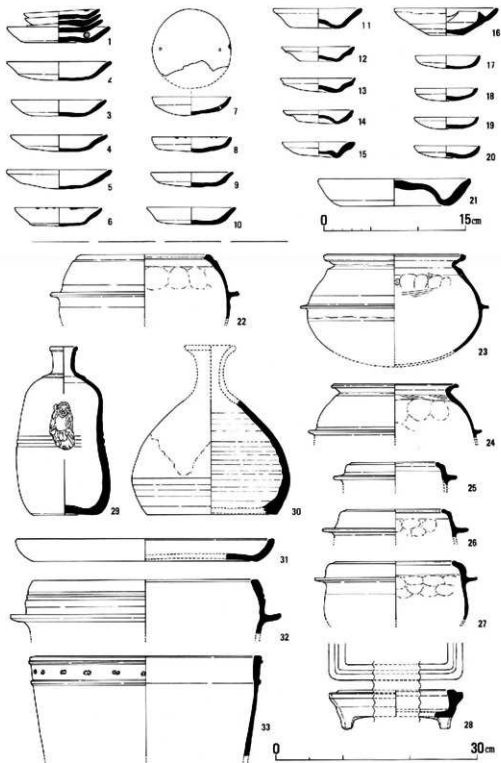
陶磁器類には備前焼のすり鉢、備前焼の甕の体部破片、美濃(御深井)焼の皿、竜泉壺系の蓮弁文青磁碗、白磁皿がある。美濃焼の皿(15)は口径11.2cm、器高2.6cm、内外全面に薄緑色・透明の灰釉をかける。白磁碗(16)は口径12.4cm、器高2.9cm、内外全面に白釉を施釉し、高台端部(代付)は釉をヘラケズリでかき取り、露胎とする。

G SX6078出土土器(第61図28)

SX6078は調査区の西北部で検出した埋壔の施設。底部を打ち欠いた円筒形の瓦質土器を浅い掘形内に立てたものである。瓦質土器(28)は口径34.5cm、器高32cm前後の円筒形で、体部側面上半部に相対する2個の横耳状把手をもつ。体部内外面ともナデ調整で、内面には幅4～5cmの輪積み成形の痕跡を残す。口縁部は水平に面取りし、ヨコナデ調整で仕上げる。埋壔の施設はこのSX6078の他にも調査区の各所で多数検出しているが、それらに使用された容器はいずれもSD6130出土の瓦質土器深鉢(27)とほぼ同形態のものであり、円筒形で横耳把手をもつ形態はSX6078出土土器が唯一例である。

H SD6124出土土器(第62図)

溝SD6124は調査区の南半を東西に横断し、東溝で直角に南に折れ曲がり南流する溝。埋土の黒灰色粘質土から多量の土師器・瓦質土器と陶磁器類の破片が出土した。溝SD6130の出土品と比較すると、土師器皿類の形態・法量と、陶磁器類の内容に差がみられ、SD6124出土品より新しい要素が認められる。おそらく、しがらみSX6136によるSD6130の閉塞後も、SD6124がかなり長期にわたって溝としての機能を果たしていたことを示すものであろう。

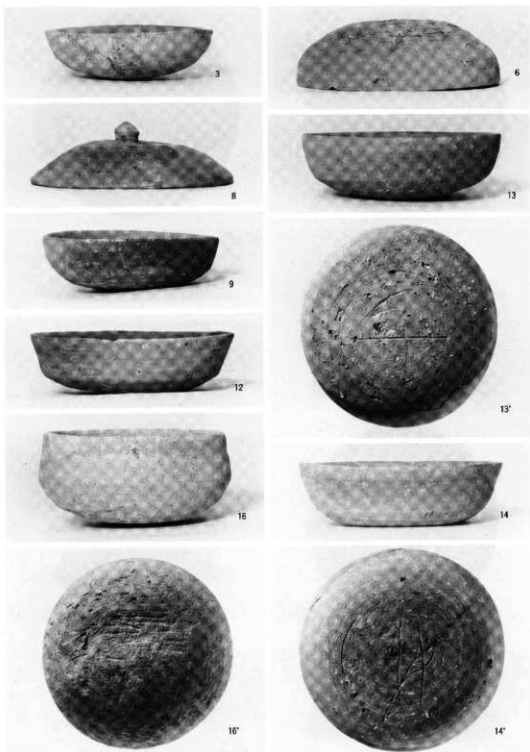


第62图 SD6124出土土器

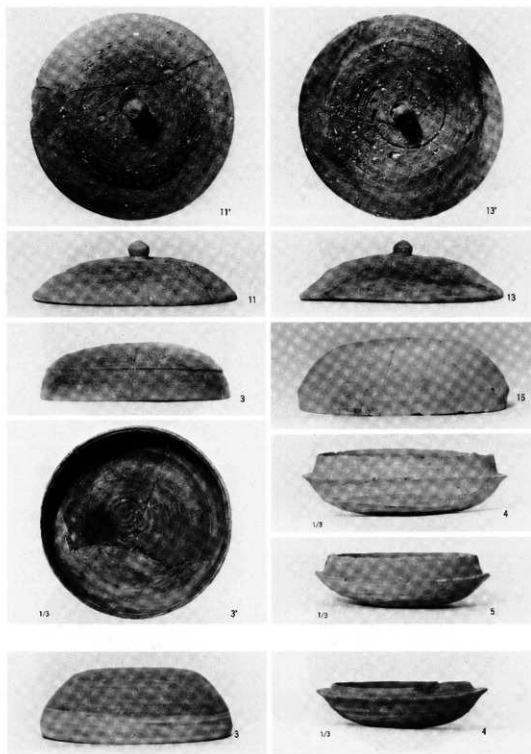
土師器には皿・羽釜がある。中に径約6cmの鉄製の輪をはさんで大小の皿4枚を上下に重ねた重ね皿(1)は東西溝の東端で出土したもの。大皿は口径10.8cm、器高1.7cm。上に重なる中皿は口径7.9~8.0cm、器高1.0~1.2cm。3枚の中皿はいずれも灯火器として使用されている。一括投棄された意味、あるいは用途については不明。大皿(2~4)は口径9.8~10.8(平均10.2)cm、器高1.8~2.0cm。口縁部のヨコナデ調整は外面下端に及ぶ。大皿(5)は口径10.8cm、器高2.1cm。ヨコナデ調整は口縁部上端に限られる。形態・流量・調整手法ともにSD6130出土の中皿(7~9)に近似する。中皿(7)は口径8.4cm、器高2.0cm。底部外周に径0.2cmの孔一対をあける(焼成前)。灯火器として使用されており、2箇の孔もその用途と何らかの関係をもつものか。中皿(6・8~10)は口径8.3~9.2(平均8.8)cm、器高1.6~2.0cm。口縁部のヨコナデ調整は外面下端まで。小皿(17~20)は口径6.5~6.9(平均6.7)cm、器高1.2~1.4cm。ヨコナデの範囲は17・18・20は口縁部下端まで、19は上端に限られている。底部が上方へ突出する形態の皿にも大小の流量をもつものがある。大皿(21)は口径16.0cm、器高2.9cm。底部内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ調整で、底部外面には成形時の指頭爪痕を残す。中皿(11)口径9.2cm、器高2.1cm。小皿(12~15)は口径7.4~7.8(平均7.6)cm、器高1.5~1.6cm。口縁部のヨコナデ調整はいずれも外面上端までに限られ、ヨコナデ調整の及ばない口縁部との間に明瞭な段を残す例がみられる(12~14)。羽釜(23・24)は口径20.0cmと18.0cm。菅原の「大和B₃型」である。体部内面上半部には成形時の円形当板痕とハケ目調整痕を残す。羽釜(22)は口径18.6cm。菅原の「大和H₂型」。体部内面上半部に円形当板痕を残す。羽釜(25~27)は口径12.6cm、14.2cm・17.4cm。菅原の「大和H₃型」。26・27は内面に円形当板痕を残す。型式別の出土個体数は大和B型が12個体、H型が5個体。

瓦質七器には皿、羽釜、すり鉢、火鉢、花鉢と深鉢類がある。皿(31)は口径38.0cm、器高3.3cm。底部は砂底で、底部内面ナデ調整、口縁部内外面ヨコナデ調整で仕上げる。羽釜(32)は口径33.0cmの大形品。口縁部外面に凹線2条をめぐらせ。深鉢(33)は口径32.6cm。口縁部外面に2条の突帯をめぐらし、その間に竹管状のものによる2箇一対の円形スタンプ文をめぐらす。花鉢(28)は平面方形の浅鉢形で、口縁部内面ナデ調整、外面はヘラケズリで調整し、底面隅に高さ1.7mの断面方形の短い脚をつける。

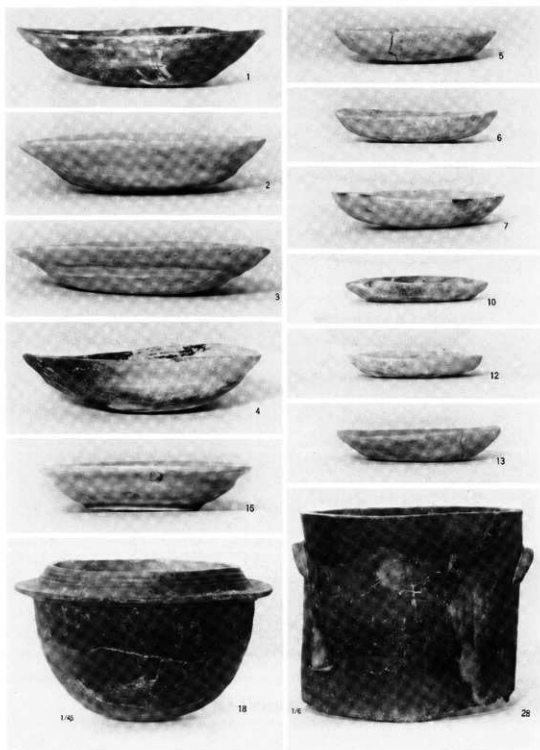
陶磁器類には油杯、備前焼のすり鉢、大甕、丹波焼の扁壺(人形徳利)、壺(船徳利)の他、産地不明の陶器類の破片多数がある。油杯(16)は口径10.9cm、器高2.8cmで、ほぼ完形。口縁部内面中位に断面三角形の突帯をめぐらし、突帯の1ヵ所に幅2.6cmの半円状の切り欠きをつくる。底部外面~口縁部下半ヘラケズリ調整で、内面~口縁部外面上端に灰色釉をかけ、以下は露胎とする。扁壺(29)は器高17.7cm。体部中位に2条の凹線をめぐらし、型押し別造りの人形(布袋像)を貼付ける。壺(30)は底径19.2cm。底部外面不調整で、体部下半ヘラケズリ調整。暗赤紫色の素地の体部上半に灰緑色釉をかける。



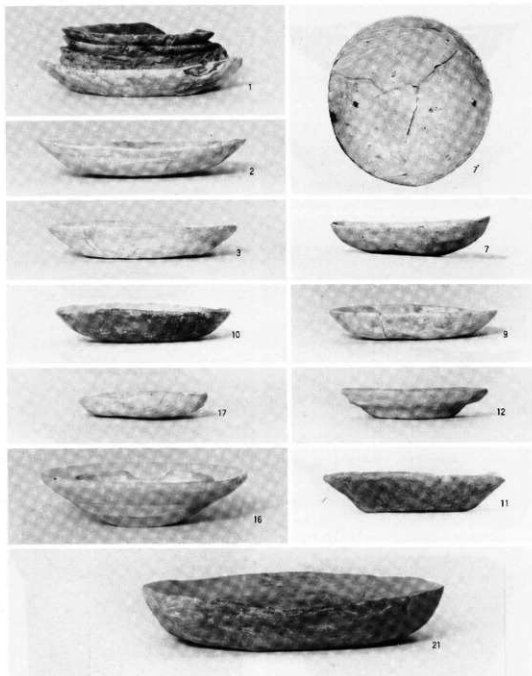
第63图 SD6160出土土器(1:2)



第64图 SD6191・6214出土土器(1:2.1:3)



第65圖 SD6130・SX6078出土土器(1:2~1:6)



第66圖 SD6124出土土器(1:2)

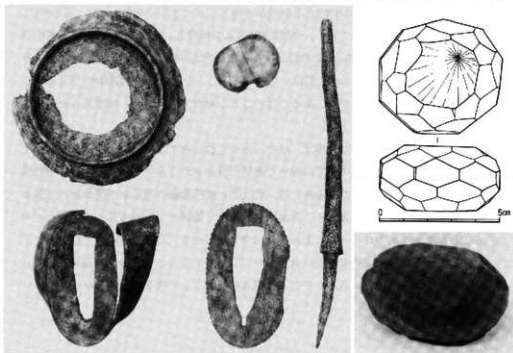
3. 木製品ほか

今回の調査で出土した木製品類は、古墳時代の流路SD6214に埋没していた丸太材や角材のほかは、大半がSE6157・SE6204・SD6130などの中世の遺構に伴うものである。

SD6214からの出土材には製品はないが、カシのような広葉樹の板材もある。

中世にぞくする遺物のうち、SE6157・SE6204は大型曲物を井戸枠としたもので、ともに径約40cmある。これらの曲物は厚さ0.3～0.6cmの薄板を、幅1.5cmの樺皮で縫い合わせたものである。いずれも保存状態が良くないため、何段で井戸枠が構成されていたかは不明である。SD6130からは、曲物、位牌の台、縦板組みの桶、球状木製品とも呼ばれる種などが出土している。曲物は径20.3cmの底板に側板をつけたものと、径21cmの底板だけのものなどがある。位牌の台は、下幅12.3cm、上幅11cm、厚さ3.8cm、高さ4.2cmの台形状をしており、上面の後部に溝幅0.8cm、深さ1.7cmの柄穴が割り込まれている。樹種はヒノキ。種は、長径5.3cm、短径4.8cm、厚さ2.8cmの楕円形をした扁平な球で、心持材を輪切りにしたものを刀子で面を取り、多面体としている。樹種はモチノキらしい。この種の種は、福山市草戸千軒町遺跡、長岡京市神足遺跡、奈良市薬師寺旧境内、鎌倉市鶴岡八幡宮境内遺跡等から出土しており、いずれも中世遺物とともに出土している。

他にSK6104出土の青色をした扁平なガラス・丸玉・茎を作り出した青銅棒があるが年代は不明。また、ふいご羽片断片や鉄沖片が若干出土しているが、遺構はよくわからない。



第67図 調査地出土青銅製品とガラス玉・SD6130出土の種とその実測図

IV ま と め

収納庫建設予定地における発掘調査の成果と問題点とをとりまとめておこう。

発掘区の東辺と南辺で検出した飛鳥時代の溝SD6160・SD6191の両溝の方位は、斑鳩宮跡の建物群や若草伽藍の方位とほぼ一致する。したがって、調査中はこれらの溝が斑鳩宮造営時に設けられたものかと考えたのであるが、南北溝SD6191の下層には古墳時代の溝があり、この流路が本来自然のものであることが明らかになった。このことは、飛鳥時代に至って古墳時代の溝SD6212に改修を加えて、この地域の主要排水路として整備された可能性を示すものである。斑鳩宮や若草伽藍の造営方位が真北と大きく異なる理由は、この地域の地形に合わせたものと考えられているが、今回検出した溝SD6191がSD6212を踏襲していることは、そうしたことを示すものといえよう。


















昭和56年度における防災工事に伴う発掘調査の際、第102・103トレンチで飛鳥時代の南北溝SD1001を検出した。その位置は律学院北側の西面築地際である。溝の東肩と、溝底を検出し、飛鳥時代の上器片を含む堆積上を確認している。西肩はこの直ぐ西側の南北方向の道路下か、その東側溝にあるものと思われる。SD1001は、聖徳会館建設に伴う昭和34年の発掘調査の際に検出された流路の上流部分と判断されたのであった。昭和34年の調査、そして防災工事に伴う昭和57年度の調査の際にも下流部においては明確な岸を検出するに至っていないため、SD1001の正確な方位を知る必要があり、今回の調査の際に西側にトレンチを設定した。ところが、SD1001の北延長部を検出することができなかった。SD1001は飛鳥時代の基幹排水路と考えており、『法隆寺発掘調査概報Ⅱ』においては、若草伽藍中釈迦を区画する掘立柱槽SA3555・4850の検出にともなう寺域の復元的考察を加えた際には、SD1001を若草伽藍東辺を区切る溝と想定したのであった。したがって、SD1001がそれより北において後に削平されたものか、あるいはどこかで東折するものか、将来明らかにしなければならぬ大きな課題である。

収納庫建設予定地で検出した遺構は、ほとんどが近世に属するものである。意外に思えるのは、奈良時代から室町時代までの確実な遺構が検出されなかったことである。東院伽藍の造営が行われてしばらくの時を経た後、東大門と東院伽藍の間にも子院が次々と営まれる。それらの子院の裏手にあたるこの地域は、後世に遺構として残るほどの建物など営まれることがなかったのだろうか。あるいは山畑として近世に至るまで耕作が続けられていたのだろうか。福園院や福生院の裏手については、少なくとも斑鳩宮の範囲に含まれる可能性が考えられる。このあたりのことも将来の課題として残ることになった。


















瓦 樣 式	內 區					外 區				順序數					
	中 房 瓦	蓮 子 數	內 區 瓦	弁 瓦 數	外 區 瓦	內 環		外 環		西 院 瓦	西 院 邊 瓦				
						幅	文 樣	幅	高 文 樣						
	156	34	1+6	136	29 37	T9	10	/	(5)	/	2	5	7		
	(164)	30	1+4	131	34	T10	10	/	5	/	1	1	1		
	(176)	41	1+8	150	37	T8	13	/	9	/	2	2	4		
	(162)	48	1+8	(165)	33	T8	(10)	/	8	/	1	1	1		
	185	32	1+5	156	42	T8	18	/	4	/	1	2	3		
	162	46	1+8	118	31	T8	22	K	7	/	1	1	1		
	178	27	1+6	120	21	T12	29	15	S25	14	4	LV46	1	1	
	(102)	24	1+4	(116)	19	T13	23	12	S24	11	4	LV	1	1	
	158	58	1+5+5	102	33	T8	28	15	S16	13	9	/	2	2	
	(181)	43	1+6	154	55	T6	15	/	14	/	1	1	1		
	167	33	1+8	131	29	F8	18	/	11	/	1	1	2		
	196	84	1+7+11	165	40	F8	17	10	LV47	7	2	/	12	12	
	184	72	1+7+11	150	37	F8	17	12	LV37	5	2	/	13	3	15
	165	63	1+7+11	136	34	F8	15	9	LV47	6	4	/	2	2	
	170	60	1+6+10	133	36	F8	17	13	LV32	4	2	/	1	2	3
	174	64	1+7+11	139	34	F8	17	11	LV	6	2	/	1	1	

T-斗弁 F-拔弁 S-埤文 K-圓繪-界繪 LV-繪繪畫文 KT-刺版文 KK-均整畫草文 KH-均整忍冬畫草文
HK-額行畫草文 NH-額行忍冬畫草文 TN-手形忍冬畫草文 SH-額行忍冬畫草文 直-直線 曲-曲線 段-段線










第1表 軒瓦分類表(1)

图 号	中 径 径	内 区					外 区					体数		
		通 子 数	内 区 径	奔 幅	奔 数	外 区 径	内 区		外 区		西 院	西 院 总 数		
							幅	文 样	幅	高			文 样	
 38B	184	64	1+4+10	142	32	F 8	21	9	L.V	12	40	/	3	3
 38C	164	55	1+4+8	134	35	F 8	15		L.V		4	/	3	3
 42A	172	33	1+4	(25)	24	F 8	24	12	S	12	8	L.V	1	1
 43A	173	82	1-5+10	137	34	F 8	18	13	S48	5	2	/	1	1
 44B					43	F	18	10	S	8	11	/	1	1
 178	178	67	1-K+8	136	33	F 8	21	14	S19	7	3	/	1	1
 169	169	55	1+2+(15)	109	30	F 8	30	12	S22	18	13	/	3	3
 11A	73		1-5+11		35	F 8	17	5	S	12	2	L.V	1	1
 53A	43		1+4+8		27	F 8	25	17	S	9	3	L.V	1	1
 54A	153	38	1+8	99	26	F 8	27	14	S32	13	5	L.V	1	3 4
 54B	40		1+8		25	F 8	25	12		13	8	L.V	3	3
 54C	(174)	82		124	28	F 8	(25)	9		(16)	17	/	1	1
 76A	179			100		F 8	35	14	S36	21	12	/	1	1
 76B	176			82			47	21	S24	26	17	/	3	3
 76C	175			95			40	16	S28	24	11	/	1	1
 76D	163			122			21		/	11		/	1	1
 76A	148								S16	8		/	1	1
巴 文												113	58	108
												21	172	87 239

















第2表 軒丸瓦分類表(2)

	瓦 当 面										額 の 形 態		個 体 数				
	上 弦 幅	弧 深	下 弦 幅	厚 さ	内 文 厚 さ	内 区 文 様	上 外 区 厚 さ	上 外 区 文 様	下 外 区 厚 さ	下 外 区 文 様	幅 解	器 区 文 様	文 様 の 深 さ	西 院	西 院 東 辺	計	
	240	90	235	48	21	KT	13	/	12	/	42	/	4	段	1	5	6
						TN		/		/				直	1		1
				65		SN		/		/		2.5		直	1	1	2
	266	50	305	38		SN		/		/		3		直		1	1
	241	43	256	45		NK		/		/	50	/	3.5	直	3	1	4
	316	(55)	363	58	47	NK	3	/	8	/	63	/	3	直	17	2	19
	(27)	(67)	310	51	30	NK	4	/	8	/	57	/	3	直		2	2
	293	61	323	55	41	NK	6	/	8	/	50	/	3	直	20	3	23
	299	59	325	58	42	NK	9	/	7	/	58	/	3	曲		1	1
				43	35	NK		/	7	/	55	/	3	段 曲	2	1	3
				47	38	NK	11	/	5	/	4	/	2	直		1	1
				64	43	NK	10	/	11	/	56	/	4	直		3	3
	(275)		288	56	40	NK	9	/	7	/	48	/	3	直		1	1
	294	54	297	54	27	HK	13	S20	14	S(18)	(63)		3	直	2	1	3
				70	21	KK	23	S	26	LV		S3	6	曲		1	1
	273	50	293	60	25	KK	15	S21	20	S21	56	S3	3	曲		4	4
	275	50		72	21	KK	23	S21	28	S(21)		S3	2	曲		2	2

第3表 軒九瓦分類表(1)

	瓦 当 圖											個 体 数						
	上弦幅	上弦深	下弦幅	厚 さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	縁 幅	縁区文様	文様の深さ	型の形態	西 院	西院兼庭	計	
	302	(60)		79	32	KK	30	S25	17	S21		S3	2	曲	1		1	
	256	60	283	60	28	NK	13	S(33)	19	LV37	(66)	/	3	段曲	15	10	25	
				73	35	KK	21	S(7)	17	S	53	S	7	曲	1		1	
	260	37	234	57	26	KK	18	S13	13	S13	55	S3	5	直	1	2	3	
	273	45	281	61	26	KK	17	S12	16	S 9	65	S3	5	曲	2		2	
				50	23	KK	13	S	14	S		S	4	直	3		3	
	(287)			261	53	21	KK	19	S26	13	S31	47	S3	7	段	2		2
	277	44	274	50	16	KK	17	S20	17	S26	49	S4	5	段	1		1	
	285	44	299	59	15	KK	24	S32	20	S26	59	S5	7	段	5		5	
				52	34	KK	8	S	10	S	39	S	4	段		1	1	
	282	61	284	53	22	KK	16	S 5	17	S 5	63	S2	3.5	段曲	1		1	
				(53)	30	KK	14	S 5	18	S(5)	75	S3	2	東曲		1	1	
	275	41	278	46				S 7		S 7		S3	2	直	1		1	
	261	45	266	57	28	KK	18	/	11	/	63	/	7	段	1		1	
	218	32	221	40	21	KK	11	/	8	/	45	/	11	段		1	1	
	245		244	49	27	KK	11	/	11	/	53	/	4	段		1	1	
	214	28	218	41	23	KK	10	/	8	/	(40)	/	7	段		1	1	

第3表 軒平瓦分類表(2)

	瓦 当 面											個 体 数						
	上弦幅	下弦深	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	幅	幅区文様	文様の深さ	張の形態	西	東	計		
	170A	280	50	277	66	26	KK	23	/	17	/	/	7	段	1	1		
	171A	275	35	268	52	26	KK	12	/	14	/	64	/	7	段	2	2	
	172B	268	45	273	53	32	KK	10	/	11	/	68	/	8	段	1	1	
	172C	258	38	235	50	26	KK	12	/	12	/	51	/	7	段	5	1	6
	172D	276	42	(277)	57	38	KK	15	/	13	/	(61)	/	8	段	1	1	
	172E	258	39	236	40	21	KK	10	/	9	/	48	/	7	段	2	2	
	173A	240	35	232	51	21	KK	15	/	15	/	49	/	6	段	2	2	4
	174B	275	45	274	64	34	KK	15	/	15	/	68	/	7	段	3	1	4
	175A	(277)		271	58	33	KK	13	/	12	/	(68)	/	9	段	10	2	12
	176A	205	32	210	42	22	KK	9	/	11	/	45	/	8	段	3	3	
	178A	238	44	240	44	25	KK	9	/	10	/	56	/	5	段	1	1	
	181A	271	49	276	54	31	文字	12	/	11	/	55	/	7	段	1	1	
	182A	258	44	272	67	37	文字	18	/	12	/	70	/	13	段	3	3	
	186D	(212)	(27)		48	17	S	18	/	13	/	48	/	8	段	5	5	
	188E				(34)	12	S	(12)	/	(10)	/	36	/	8	段	1	1	
	189					20			/	(10)	/		/	6	面	1	1	2
近世瓦類														62	27	89		
														計	196	71	267	

第5表 軒平瓦分類表(3)

昭和55年度

番号	トレンチ番号	番号	トレンチ番号
1	80-6-I	34	80-12-III
2	6-II	35	12-IV
3	6-III	36	12-V
4	6-IV	37	12-VI
5	6-V	38	12-VII
6	6-VI	39	81-1-I
7	7-I	40	1-II
8	7-II	41	1-III
9	7-III	42	1-IV
10	8-I	43	1-V
11	8-II	44	1-VI
12	8-III	45	1-VII
13	8-IV	46	1-VIII
14	8-V	47	1-IX
15	8-VI	48	1-X
16	9-I	49	2-I
17	9-II	50	2-II
18	9-III	51	2-III
19	9-IV	52	2-IV
20	9-V	53	2-V
21	10-I	54	2-VI
22	11-I	55	3-I
23	11-II	56	3-II
24	11-III	57	3-III
25	11-IV	58	3-IV
26	11-V	59	3-V
27	11-VI	60	3-VI
28	11-VII	61	3-VII
29	11-VIII	62	3-VIII
30	11-IX	63	3-IX
31	11-X	64	3-X
32	12-I	65	3-XI
33	12-II		

昭和56年度

番号	トレンチ番号	番号	トレンチ番号
101	81-6-I	134	81-12-VII
102	7-I	135	82-1-I
103	7-II	136	1-II
104	7-III	137	1-III
105	7-IV	138	1-IV
106	7-V	139	2-I
107	7-VI	140	2-II
108	8-I	141	2-III
109	8-II	142	2-IV
110	8-III	143	2-V
111	8-IV	144	2-VI
112	8-V	145	2-VII
113	9-I	146	3-I
114	9-II	147	3-II
115	9-III	148	3-III
116	9-IV		
117	9-V		
118	10-I		
119	10-II		
120	10-III		
121	10-IV		
122	10-V		
123	10-VI		
124	10-VII		
125	11-I		
126	11-II		
127	11-III		
128	12-I		
129	12-II		
130	12-III		
131	12-IV		
132	12-V		
133	12-VI		

第6表 昭和55・56年度発掘調査位置一覧表

昭和57年度

トレンチ			位 置
番号	記 号		
201	82-4-I	東院東回廊北側坪掘	
202	82-4-II	東院東回廊南側坪掘	
203	82-4-III	東院東回廊外東西	
204	82-4-IV	東院東回廊東側南北	
205	82-4-V	東院東回廊東南隅から斜	
206	82-4-VI	東院礼堂南の東西	
207	82-4-VII	東院礼堂西南の斜	
208	82-4-VIII	東院南門西の南北圧入受	
209	82-4-IX	東院竜神池西	
210	82-4-X	東院四脚門南	
211	82-5-I	中間地区羅漢堂北	
212	82-5-II	東院伝法堂東	
213	82-5-III	大宝藏殿内東側	
214	82-5-IV	大宝藏殿の東南圧入受	
215	82-5-V	大宝藏殿南倉東の東西	
216	82-5-VI	大宝藏殿の北端	
217	82-6-I	東院伝法堂裏	
218	82-7-I	東院伝法堂西北隅	
219	82-7-II	安養院表門南～普門院前	
220	82-7-III	聖徳会館東北隅圧入基礎	
221	82-7-IV	善住院表門南側の坪掘	
222	82-7-V	善住院内の南坪掘	
223	82-8-I	大宝藏殿表門から北へ	
224	82-8-II	普門院前～実相院前	
225	82-8-III	大宝藏殿西側広場	
226	82-9-I	善住院の水路横断	
227	82-9-II	実相院前から北へ	
228	82-9-III	調子丸燈舎前	
229	82-9-IV	大宝藏殿手洗所から北へ	
230	82-9-V	食堂裏側旧製材所跡	
231	82-9-VI	大宝藏殿表門南坪掘	
232	82-9-VII	227と232の間	

トレンチ			位 置
番号	記 号		
233	82-9-VIII	鏡池東岸坪掘	
234	82-10-I	表室北側・鼎工作所南	
235	82-10-II	表室北側の東西	
236	82-10-III	表室西側の南北	
237	82-11-I	食堂・細殿西側の南北	
238	82-11-II	綱封藏北側の東西	
239	82-11-III	東回廊から東室側へ東西	
240	82-11-IV	細殿前	
241	82-11-V	聖雲院西側の南北	
242	82-11-VI	聖雲院前の南北	
243	82-11-VII	聖雲院前の東西	
244	82-12-I	手水舎北の南北	
245	82-12-II	手水舎西の東西	
246	82-12-III	手水舎西の南北	
247	82-12-IV	245トレンチから西へ中門迄	
248	82-12-V	247から北へ	
249	82-12-VI	26・27と接続の南北	
250	82-12-VII	実相院前～弥勒院前	
251	83-1-I	弥勒院前～能石階段下まで	
252	83-1-II	中門前の東西	
253	83-2-I	中門前参道東側の南北	
254	83-2-II	SK3565のための拡張	
255	83-2-III	SA3555のための北拡張	
256	83-2-IV	SD2140のための拡張	
257	83-2-V	SA3555のための南拡張	

第7表 昭和57年度発掘調査位置一覧表

昭和58年度

トレンチ		位 置
番号	記 号	
258	83-5-I	西室・西院回廊間の北側
259	83-5-II	西室・西院回廊間の中間
260	83-5-III	西室・西門堂間の東側
261	83-5-IV	西室・西門堂間の西側
262	83-5-V	明王院跡
263	83-6-I	能石階段・西面回廊間
264	83-6-II	円明院跡・西室間
265	83-6-III	円明院跡
266	83-6-IV	西方院跡
267	83-6-V	西院西面回廊の西側
268	83-7-I	南大門・能石階段間
269	83-7-II	能石階段・大湯早間
270	83-8-I	西院南面回廊の南西

トレンチ		位 置
番号	記 号	
271	83-8-II	西院回廊南西隅・三経院前間
272	83-8-III	西室・西院回廊間の南側
273	83-9-I	宝珠院・西室間
274	83-9-II	西園院西側の北
275	83-9-III	西園院西側の中間
276	83-9-IV	西園院西側の南
277	83-9-V	中院東築地東側
278	83-9-VI	西門堂周間
279	83-9-VII	西門堂南階段の南側
280	83-10-I	大湯屋・中院間
281	83-10-II	中院南築地南側
282	83-10-III	西大門東側
283	83-11-I	南大門北側

第8表 昭和58年度発掘調査位置一覧表(収納庫予定地を除く)

調査年度	調査面積	調査期間	備 考
53	280㎡	53.12.7～54.1.25	西院西面大垣内側。(トレンチ数1)。
54	447	54.8.27～55.3.31	東院西面築地内側・西院上御堂地区。(3)
55	1,000	55.6.13～56.3.31	西院全城。(33)。
56	1,700	56.6.1～57.3.31	寺城全城。(48)。
57	2,200	57.4.2～58.3.31	主として西院東半部。(43)。
58	1,314	58.5.9～59.3.31	主として西院西半部。(26)。

発掘調査総面積 6,941㎡。

トレンチ総数 154。

第9表 各年度発掘調査面積及び調査期間(収納庫予定地を除く)

法隆寺発掘調査概報Ⅲ

—昭和58年度防災工事に伴う発掘調査
及び収納庫建設工事に伴う発掘調査—

昭和59年7月20日印刷

昭和59年7月26日発行

発行 法隆寺発掘調査概報編集小委員会

奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺

電話 07457- (5) 2355

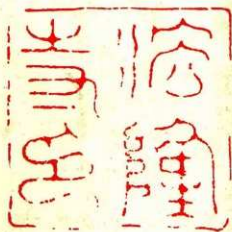
印刷 共同精版印刷株式会社

奈良市三条大路2丁目2-6

電話 0742 - (33) 1221

表紙解説

「聖徳太子絵伝貼付絵」東院絵殿の壁間に描かれた、聖徳太子の生涯の事蹟を描いた一部で、法隆寺建立の部分である。天明7年(1787)に大坂の絵師古村周圭が川図を模写したもの。



太子劉雅城東望本宮
驛曰班德宮之紫丹夾火
之天村中寸心者入此